
魔王になった元一般人

鍵一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王になった元一般人

【Nコード】

N9185H

【作者名】

鍵一

【あらすじ】

夏、学校帰りにスーパーに行く為に裏通りを歩いていた黒桐潤。いきなり足元が光ったと思ったら、そこは異世界だった。そこに居たのは人ではなかった。そして、貴方は魔王だと告げられる……。

序章 召喚された日

「あー……。暑い。何でこんなに暑いんだ……」

「夏だからね。仕方ないよ」

今日は八月十日。

まだ高校二年生である僕たちは、夏休みを満喫している。

……しているのだが、僕たちは学校指定の服を着ている。何故なら今日は登校日だからだ。

たったの一時間の授業……というか、HRを終え、帰宅する途中だ。ああ、言い忘れていたが、僕の名前は黒桐 潤（こくとう じゅん）。某型月に出てくるメガネと同じ名字なので、ソッチ系の人によく話しかけられる。

僕も、どちらかというとソッチ系の人間ではある。

「でもさー、夏だから暑いんだ、って言うのは諦めてる気がするんだよね」

「何に？」

「人生に」

「あつそ」

僕の隣りで暑い暑いと五月蠅いヤツは、荻島 尚輝（おぎしま なおき）。一応、僕の友人ということにしているクラスメイトだ。

「そんなに暑いんなら全裸で公園の噴水にでも入ってたらず」

「そんなことしたら警察に捕まるじゃん」

「五月蠅い。お前は一度捕まった方が世の中の為だ。たまには役に立て。主に僕の心の平穩の為に」

お前が居ると面倒事に巻き込まれるんだよっ！

「こんなに暑いのにその毒舌は相変わらずだな」

「お前のバカなところもな」

「うるへー」

まったく、こいつは何時まで経っても相変わらずだ。荻島と知り合って一年程経ったが、もう何年も前から一緒にいたような気がする。多分こいつの人懐っこい性格がそう錯覚させるのだろう。

「あ、オレ、バイトあるからもう帰るわ」

「そうか。遅刻するように頑張ってくれ」

「おうっ！任しとけ！……って遅刻するのを頑張ってどうするんだよ！ーそこは『遅刻しないように頑張ってくれ』だろう！？」

「見事なノリツツコミだな。それより、急いだ方がいいんじゃないか？」

時計を見ると、そこには十時三十分と表示されていた。朝、こいつ

は十時四十分までにバイト先に着かないと先輩に怒られるとか言っていた様な気がする。確か、こいつのバイト先まで、ここから走って十分かかる距離だったと思うんだが……。

「ち、遅刻だ……!!」

大丈夫ではなかったらしい。顔を青くして走っていった。まあ、あいつの足の速さはモリス・グリーンも真つ青になるぐらい速いで、ギリギリ間に合うだろう。……間に合わなければいいのに。まあ、そんなことはどうでもいい。さっさと帰ろう。

「あ、醤油切らしてたんだ。買いに行かないと」

訳あって、僕は今一人暮らしだ。家事も一通りこなせる。だからナニ？って感じだけだな。

行きつけのスーパーまで徒歩二十分。この暑い中、二十分も歩かなければいけないと思うと、気が滅入る。

そういえば、近道があるんだっけ。近道を使えば十五分でつけた筈だ。たとえ五分でも短縮できるなら、近道を使おう。

人気のない裏通りを通る。太陽が鬱陶しくなるぐらい照り付けているのに、薄暗く感じる。

日陰者が入り浸るには丁度いいのだろう。僕には到底理解出来ないがな。そんなことを考えている時だった。突然、足元が光だしたのだ。その凄まじい光量に思わず目を瞋る。そして、僕は妙な浮遊間に襲われた。

光が消え、浮遊感がなくなったので、目を開いた。そこにいたのは沢山の化物、化け物、バケモノ。

……え、ナニコレ、ナニガドウナッテルノ？

いやいや、落ち着け。クー……、ああダメだ。これを言ったら鉈女に殺される。要するに、死亡フラグってことさ。

ってそうじゃない！落ち着け、落ち着くんのだ。僕ならできる。

スゝハゝ、スゝハゝ……。よし落ち着いた。やっぱり落ち着くには深呼吸が一番だな。

「お待ちしておりました。魔王様」

化物共の中から歩み出てきた比較的人間っぽいヤツが話しかけてきた。

ていうか、今こいつ何て言った？僕の耳がオカシイのだろうか。それともあまりの暑さに頭が可哀相な人になってしまったんだろうか？

「あ、あのゝ。今何て言いました？」

「貴方様が魔王様であらせられる。……そう言いました」

……え、マジで？

いやいや、ちょっと待とうよ。確かに此所が地球ではないことは明らかだよ？いきなり夜になってるし、月も紅いし……。でもね、異世界に召喚されて『貴方は魔王です』とか言われたら困るでしょ？勇者とか英雄ならまだ納得のしようがあるのに……。召喚されて魔王になるとかアリエナイ。

まあ、いいか……。此所が異世界で、僕は魔王として召喚されたんだ。今さら拒否も出来ないだろう。なら魔王として振る舞うしかない。

「いきなりこんなところに呼び出されて、少々困惑している。すぐに落ち着ける場所に案内してほしい」

「畏まりました。魔王様。では、私について来て下さい」

はてさて、これからどうなることやら……。まあ、何とかなるか。人生、なるようにしかならないしね。

第一話 説明

「ということですよ。何か、質問はありますか？」

僕は今、この男……………吸血鬼のヴラドに魔王城の一室に案内され、この世界の説明を受けている。

あの広場からこの部屋まで二十分かった。どんだけ広いんだよ！？と思わずツツコミそうになったのは仕方のないことだと思いたい。おっと、話が逸れたな。ヴラドによると、この世界は『ファンタズマ・ゴリア』というらしい。そして、この世界の住人は僕の居た世界のことを『オリジン』と呼んでいるそうだ。この世界はオリジンの人々の想像や幻想によって創られているらしい。要するに、宗教や神話などを信じる心、もしくは懂れで形作られているのだ。

そういった、人々の夢の世界なのだから、当然魔術の類も存在する。魔術には属性があり、火、水、土、雷、風、光、闇の七種類から成っている。まあ、魔術の詳しい説明は後回しにしよう。……………べ、

別に説明するのが面倒臭いとか、そんなんじゃないんだからねっ！

……………やめよう。悲しくなるだけだ……………。

それよりも、この世界に召喚された理由だが、別に人間を滅ぼそうとか、そういうんじゃないらしい。むしろ人々を護るために呼んだらしい。

この世界には魔王が三人存在して、『ヴェルタイム帝国』に一人、『グランカルタ王国』に一人、そしてこの『ガリア共和国』に最後の一人が存在する。

いや、正確には『存在した』が正しい。一月程前に病死したとか。前魔王は死の間際に、『しきたり道理、オリジンから魔王を召喚せよ』と遺言を遺した。ヴラド達はその遺言に従い、オリジンで最も魔王に相応しい人間を召喚した。

それが僕こと、黒桐 潤だったということだ。

「つまり……、僕が魔王に相応しいってこと？」

「そういうことになりますね」

冗談じゃない！僕の何処が魔王に相応しいというのだ！！恐喝してきた不良共を逆に脅迫したり、学校でイチャモンつけてきた阿呆共を社会的に抹殺するような心優しい僕に魔王なんて似合わないに決まってるじゃないか！！

「ジュン様。それは十分魔王っぽい行いだと思います」

何だとっ！？……………てか今、声出てた？

「ええ」

マジか……。気を付けよう。

「それでそのしきたりというのは？」

「今からおよそ一千年前……………、闇の帝王と名乗る、魔物を生み出し、操る者がいたのです。そして、闇の帝王を屠ったとされるのが……………、オリジンからやってきた、魔王と勇者だったのです。それ以来、有事の際にはオリジンから魔王と勇者を召喚するのが習わしとなっています」

「その二人は召喚されて此処に来たの？」

「いいえ……。当時はまだ召喚魔法の研究が進んでおらず、オリジン

ンから人間を召喚することはできません。二人はオリジンから迷い込んで、この世界にやってきたのです」

「こつちの世界にやってくる人って結構いたの？」

「大体、百年に一人の割合でやってきます。そして、その人々は例外なく魔術、もしくはそれに代わる何らかの能力を持っていました」

それがオリジンから人間を召喚する理由か……。

「それで、僕はこの世界で何をすればいいわけ？」

「近頃、魔物が異常に増えているのです。更に知性のない筈の魔物たちが組織的な動きを見せていることから、闇の帝王が復活したのではないかと懸念されています。……貴方には魔物の討伐及び闇の帝王の探索と抹殺を御願いしたい」

おおよそ予想通りだな。この展開はお約束だよね。ついでに、魔族と魔物の違いを説明しておこう。魔族には理性があり、魔物には本能しかない。簡単に言うと、魔族が人間で、魔物が動物だ。かなりの暴論だけどな。

「その前に一つ聞きたいことがある」

「何ですか？」

「僕は……、元の世界に帰れるのか？」

「それは……、その……」

まあ、これも予想通りの反応だ。

「帰せないんだな？」

「……………すみません」

異世界召喚もののお約束だよな。

「別に構わない。オリジンに未練がある訳じゃないし、此処で魔王をやってやるよ」

「本当ですか!？」

現金な奴だな。さっきまであんなに暗くなってたのに、今は喜色満面だ。

「但し、条件がある」

「はい。何なりと」

「お前達は僕の命令を聞くこと、魔術をもつと詳しく教えること、後は僕の自由を認めること。これが条件だ。異論は認めん」

「畏まりました」

「それじゃ早速魔術について教えてもらおうか」

あれから十分程魔術の講義を受け、今は今日から僕の部屋になった

前魔王の部屋で横になっている。

漸く独りになれた。今のうちに魔術のおさらいをしておこう。

さっきも言ったように、魔術には七種類の属性があり、水の属性は氷の属性も兼ねていたりとか。因みに、光と闇の属性を扱える人は少なく、数人しかいない。しかし、オリジンから召喚された魔王と勇者は使えるらしい。となると、僕の得意な属性は闇、ということになる。その他の属性も使えるかどうかは追々確かめるとしよう。

まずは己の魔力を感じることからだ。

自らの内に意識を向ける。己の魔力を感じる。大切なのはイメージだ。イメージしろ。イメージするのは、常に最強の自分だ。

赤い弓兵のアドバイスを思いだしながら、イメージトレーニングを十分程続けていると、唐突に今まで感じられなかった“なにか”を見つけた。

この感覚……、これが、魔力か……。

黒く、昏く、暗く、そして深い。これが僕の魔力。イメージとしては、まさに“闇”だ。

だが、とても暖かい感じがする……。僕の魔力だからなのか。それとも……。いや、考えるのはよそう。考えて判るモノでもない。

部屋に立掛けてある時計を見ると、深夜二時を回っていた。

………寝るか。

第二話 腹ペコ魔王

「ヴラド。お腹が空きました」

今の時刻は午前三時。つまり深夜だ。普通なら寝静まっている時間だが、何事にも例外はある。

「ジュン様。夜中にご飯を食べると太りますよ？」

「ヴラド。僕が召喚されたのは、オリジンの時刻で午前十時三十分……。こつちの世界では夜だった……。僕の言ってる意味が分かるよね？」

オリジンではとくにお昼ご飯を食べ終わっている時間帯だ。これに気付いたのはホンの十分前。なかなか眠れない理由を考えている時に思い出したのだ。

しかも、こつちでは深夜だが、あつちではまだお昼時……。眠れるハズがない。

「も、申し訳ございません！すぐに用意させますので、しばしお待ちをー！」

ヴラドが僕の言いたいことに気付いたようで、血相を変えて出ていった。

……。お腹減ったなあ。あー、なんか無性にチャーハンを食べたくなってきた。てかこつちにもチャーハンってあるんだろうか。

「ジュン様！食堂にいらして下さい。今、料理長が参りますので」

「分かった。今行く」

「随分と豪華な食堂だな」

「魔王様専用の食堂ですから」

この食堂はとてつもなく豪華だ。テーブルは無駄に細長いし、高そう
な壺に大きな絵……、扉や壁にも装飾が施されている。
豪華なのは別に構わないが、いや良くないけど、落ち着かないな。
無駄に広いし、キャッチボールも余裕でできそうだ。

「で、僕のご飯は？」

「こちらがメニューとなっております」

「有り難う」

ヴラドから手渡されたメニューは黒かった。

魔王だからか？ いやいや、魔王だから黒っていうのは安直すぎるだ
ろう。きっとこの料理長は黒が好きなんだ。……………多分。

「あれ？」

「どうかされましたか？」

「これって……、この世界の文字だよね？」

「ええ。それがなにか？」

「何で僕はこの世界の文字を読めるんだ？」

メニューは見たこともない文字で書かれていた。

しかし、僕はそれを読むことができるのだ。まるで、それが当たり前かのように……。

今思えば、不自然なことがある。それは言葉が通じることだ。此処は異世界なのだから、オリジンとは別の言語があっても不思議はない。

実際、ヴラドの口を読むと、発している言語が違うことは一目瞭然なのだ。

「それは、召喚魔術を使用した際に、翻訳魔術も併用しておりましてから……」

「へえ。そんな魔術もあるんだ」

魔術って便利だな。これがあれば外国語を覚える必要もないな。

「ええ。召喚された魔王様と言葉が通じなければ、意味がないですから」

「そんな魔術を研究する暇があるなら……、送還魔術の研究をした方がいいんじゃない？」

「う……、す、すみません……」

僕の皮肉に素直に謝罪するヴラド。

イイ奴だな。けど、生真面目すぎる。冗談とか通じないかもしれない。

「冗談だ。気にするな」

「し、しかし……………」

「気にするな、そう言ったぞ」

「わ、わかりました……………」

やっぱり生真面目な奴だな。からかうと面白そうだ。横で納得してなさそうなヴラドをよそに、メニューを見る。むむ、こ、これは…………。

「ヴラド。オリジンの料理もあるのか」

「え、ええ。オリジンの料理は美味ですから。こちらでも研究されているのです」

ふむ…………。恐らく歴代魔王と勇者が教えたんだろうな。僕にとっても都合がいい。

「じゃあこのチャーハンにしよう」

「畏まりました。レン。ジュン様の相手をしていなさい」

ヴラドは、いつの間にか後ろに控えていたメイドに声をかけて厨房に向かった。
てかホントいつの間に居たんだ？。すごいビックリだ。

「魔王様。私は魔王様の身のお世話をお世話を仰せつかったレンです。以後御見知りおきを」

そう言つて頭を下げるレンと名乗つた女性。

背は百六十cm程の二十歳前後の女性。髪のはきは肩にかかる程度で、淡い水色掛かった髪は凄く綺麗だ。翡翠色の瞳が、こちらを見つめている。スタイルの方は、まあ……なんだ、出てる所は出ていて、引つ込むべき所は引つ込んでいる、とだけ言っておこう。

今まで長々と解説したが、要するにすごい美人なのだ。しかもクールビューティー。

好みます。チヨオ〜好みます。文句あるかこら！

「えーっと、知つてるとは思ふけど、僕がオリジンから魔王として召喚された黒桐 潤です。よろしくお願いします。レンさん」

「ジュン様。私に敬語を使う必要はありません。後、敬称もいりません。レンとお呼びください」

「ああ、うん。よろしく、レン」

うわゝ。女の子の名前を呼び捨てにするのって恥ずかしいな。名字なら呼び捨てにしても平気なのに……不思議だ。

「ジュン様。チャーハンをお持ちしました」

「ん、ご苦労様」

ヴラドがチャーハンを持ってこっちにくる。

レンとなにを話せばいいのかわからなかったし、丁度いい。

でも配膳の仕事はメイドがするべきだと思うのは、僕だけだろうか。

「いただきます」

うん。美味しい。こつちの世界のチャーハンも中タイケるな。

「ヴラド。聞きたいことがあるんだけど」

「なんですか？」

「レンって人間だろ？魔王城っていうぐらいだから、魔族しかないもんだと思ってたぞ」

「ええ。比率で言えば、確かに魔族が圧倒的に多いですが、人間や獣人もいますよ」

「へえー。獣人もいるんだ」

そう、この世界『ファンタズマ・ゴリア』には獣人も存在する。見た目は犬耳や猫耳があって、尻尾も生えてたりする。

僕はまだ見たことないけどな。

獣人は高い身体能力を有している。その代わりに魔術は使えないらしい。だが、魔力を操ることはできるので、魔力を身体に纏わせ、身体能力を水増しすることができるのか。

「ご馳走様でした」

チャーハンも食べ終わり、やる事がなくなってしまった。時計を見ると、まだ四時にもなっていないかった。

「ジュン様。これからどうなさるおつもりで？」

レンが聞いてきた。

これ以上二人に負担をかける訳にもいかないな。

「部屋に戻るよ。後、朝ご飯は要らないから、昼食は用意しといて」

「畏まりました」

「じゃあ僕は夜明けまで部屋にいるから。おやすみ。レン、ヴラド」

「「おやすみなさいませ。ジュン様」」

二人に見送れ、部屋に戻る。ていうか、見事にハモったな。あの二人。

ホントにやることなくなったな。眠気は全然ないし、夜明けまで部屋で大人しくするしかないか。

……魔力コントロールの練習でしよう。

第三話 服がない

「ジユン様。おはようございます」

今の時刻は午前六時。夜も明け、日が上り、既に活動している人がいてもおかしくない時間帯になった。

「おはよう。レン」

部屋に入ってきたレンに挨拶を返す。

てかホントに美人だな。朝メイドに起こされる日がくるとは思わなかった。……寝てないけど。

結局、魔力コントロールの練習を今まで続けていた。他にやることがなかったんだからしょうがない。まあ、そのおかげで魔力コントロールもスムーズにできるようになったんだけどな。

「レン。僕、服の替えがないんだけど、どうすればいい？」

「ジユン様のお召し物ならココに」

レンが服の入った袋を取り出した。

てか今どっから出したっ！！

「メイドの嗜みで御座います」

……………そうですか。

なんだか深く聞いているいけない気がする。

レンの持ってきた服は、何も書かれてない白い半袖のシャツとジーンズだった。

……僕はミス・ブルーと呼ばれている世界に五人しかいない魔法使いかつ――

ついツツコミをいれてしまった。心の中で、だけどな。

「御気に召しませんでしたか……」

服を見て固まっている僕を見て、レンが少し悲しそうな声をだした。

「い、いや、そんなことないよ。ただ、オリジンの服だったからびっくりしただけだよ」

「そうですか。よかった」

レンはホッとしたのか、安堵の息を漏らした。

「それで、どうしてオリジンの服が此所に？」

「先代の魔王様が開発したのです。今ではこの世界でも、オリジンの服が市場に出回るようになりました」

先代の魔王もいいことするなあ。感謝感謝。

「この服は市場で買ってきたの？」

「いえ、実はヴラド様の部下が服を調達するのを忘れてしまったので、有り合わせのものなのです」

ヴラドの部下のうっかりミスか……。苦労してるんだろうなあ……。

「有り合わせのものって言うけどさ。どう見ても最近まで誰かが着

てました感が出てるんだけど」

ほのかな洗剤の香りがするしな。しかも洗剤の香りの他に、何かいい匂いもする。

「私の服です」

「……………は？」

「ですから、その服は私がつい先日まで着ていた私服です」

……………そっかあ。いい匂いがすると思ったら、レンの匂いだったんだね。わかります。

……………え、マジで？

「えーっと、いろいろ言いたいことはあるが、とりあえず、何故にレンの服？」

「この城で調達可能な衣類は、この城で住み込みで働いている者から調達するしかありません。しかし、住み込みで働いている者の多くは魔族で、体格が合わなかったり、人とはかけ離れた肉体をしている者ばかりで、ジュン様のお召し物には相応しくないと判断しました。よって、ジュン様と歳が近く、身長も近い私に白羽の矢が立った次第で御座います」

……………まあ、いいけどな。僕、そうゆづの気にしないしね。それに……………、役得な感じがしないでもない。

……………そこ、変態とか言わない！

「じゃあ、着替えるから」

「わかりました」

半袖の白いカッターシャツを脱ぐ。

この格好でごろごろしていたせいか、シワクチャになってしまった。もう学校に行くことはないから気にする必要はない。

そう思うと、感慨深い……………こともないな。

「ジュン様。お持ちします」

「うん。ありがとう」

視界の端から出てきた腕にカッターシャツを手渡した。

さて、次はズボンだな。このズボン、夏服のくせに暑い。冬服よりは涼しいのは確かだが……………。

ベルトを外し、ズボンに手をかけ…………… ようとしたところで手を止める。

…………… さっき僕は誰にカッターシャツを手渡した？…………… あまりに自然だったのでそのままスルーするところだった。

後ろを振り向くと、そこに居たのは…………… カッターシャツを手に、こちらを見ているレンだった。

「…………… なんでいるの？」

「主人の着替えを手伝うのもメイドの仕事ですから」

うん、真面目に仕事に取り組むのはいいことだ。

…………… できれば違う仕事に取り組んでほしかった。

「…………… 部屋から出てくれる？」

「？何故ですか？」

本当に不思議そうな顔をして小首を傾げないでください！可愛いけどダメだから！察してくれよ、頼むから！

「い、いいから出てってくれ。頼むから」

「？はあ、わかりました……」

納得はしてないが、命令に忠実な人なので、出ていってくれた。まったく、朝っぱらから疲れるわ。……全然寝てないから朝って感じがしないけどな。

着替えを済ませ、鏡を見る。そこに映っているのは、肩にかからない程度の長さの黒髪に黒い瞳を持つ僕だ。顔は童顔で見方によっては女の子に見られる時もある。そして、レンの服を着た僕の姿を見て思った。あんまり違和感ないな、と……。

なんか切ない気分になってしまった。何故だ？

「ジュン様。着替えは終わったようですね」

「おうっ！？」

いつの間に部屋に入ったのか、レンが僕の脱いだ服を手に背後に立っていた。

…… ホント、いつの間に入ってきたんだ？

「着心地はどうですか？」

「い、いや、悪くないけど………」

僕の身長は百六十五cmある。レンの身長も大体それぐらいなので、サイズのにも問題はない。

「そうですか。喜んでもらえて嬉しいです」

そう言って微笑むレンは、最高に綺麗だった。

第四話 買い物に行こう

「ジュン様。お買い物に行きましょう」

「へ？」

今の時刻は午後一時半。昼ご飯も食べ終わり、本を読んでいる真っ最中だ。

え？午前中は何をしていたかだって？

レンに城を案内してもらってたんだ。

案内されたのは玉座の間、越権室、執務室、図書室、一般食堂、魔王専用食堂、宝物庫、後は中庭ぐらいかな？

今僕が読んでいる本は図書室から借りてきた本で、初歩的な魔術について記述されている。

昼ご飯を食べてから、ずっとこの本を読んでいたのだが、いきなりレンに話しかけられた所為か、妙な声が出てしまったのは仕方のないことだと思いたい。というか絶対そうだ。だから画面の前の皆も気にしてはいけない。

……画面の前の皆って誰だよ。だいたい参ってるな。まあ、一応徹夜してることになるから、テンションが微妙にオカシイのだろう。

……まだ寝る気はないけどな。

「何を買いに行くの？」

「ジュン様のお召し物です」

「そういえば、レンに貰ったこの服と学生服しかないんだっけ……」
ファッションとかに興味ないから忘れてた。

「でもお金持ってないよ?」

「心配には及びません。こちらで支払いますから」

ジャラッと音のする袋を取り出すレン。

そういえばこの世界のお金の単位も知らないんだっけ。

「それじゃ一緒に行こうか」

「はい。お供させていただきます」

「ところでレン。その格好で行くつもり?」

「?おかしいですか?」

今のレンの格好はメイド服だ。最近の媚びたメイド服じゃない。古き良き時代の本格的なメイド服だ。

「メイドを引き連れて買い物に行ったら目立つと思うんだが……」

「確かに。使用人を連れて歩けば相手にお金があることを教えているようなものですね」

「街の治安が悪いの?」

「先代の魔王様がお亡くなりになられてから、スリの被害が増えてるのが現状です」

魔王が死んだ途端に治安の悪化ねえ。良くも悪くも魔王の影響は出

るもんだな。

「まあ、とりあえずレンは私服に着替えておいてくれ。僕は門の前で待ってるから」

「畏まりました。ジュン様」

さて、門に到着してから十分経った。レンはまだ来ない。

………遅いなあ。レン、早く来ないかなあ。

お！来たみたいだな。

百メートル離れた位置に人影が見える。

レンもこちらに気付いたようで、駆け寄ってきた。

「ジュン様。お待たせして申し訳ございません」

「ん、いいよ、別に。大して待ってないし」

「服を選ぶのに時間がかかってしまいました。主人を待たすとはメイドにあるまじき失敗です………」

凄まじい勢いで落ち込むレンの服装は、動きやすさを重視したワンピースだった。その白いワンピースはレンの淡い水色の髪によくあっている。

「似合ってるよ。レン」

「え？あ、ありがとうございます」

落ち込んでいるときに突然褒められたので、少々戸惑ったみたいだ。

「さて、そろそろ行こうか」

「はい。わかりました」

「活気のある街だな」

此所は交易都市『ザナルカンド』……………どこかで聞いたことがある
気がするのには気のせいだと思う。……………多分。

商業が発展しているだけあって、かなり人が多い。
……………この人込みの中を歩くのか……………嫌だな。

「ジュン様。市場はこちらです。参りましょう」

レンの案内で市場を歩く。

「ジュン様。この店に入りましょう」

レンに案内されたのはオリジンの服を専門に扱っている店だ。正直
言って、かなり有り難い。

「レンはここに来たことあるの？」

「ええ。ここの店主とも面識があります」

「ふうん。そうなんだ」

店主ね……。どんな人なのか興味はあるが、今は服を買うことを優先しないとな。

服を適当に見繕い、上下五着ずつ手に取る。

「これください」

「はい。銀貨五枚になります」

この世界の通貨は銅貨、銀貨、金貨だ。レンの説明によると、銅貨一枚で大体百円の価値があり、銀貨は一万、金貨は百万の価値がある。

傍らでは、レンが財布から銀貨五枚を取り出し、会計を済ませている。

この状況、傍から見れば、僕は単なるヒモ状態だ。なんとかしてお金を手に入れないとな。

「ありがとうございます。またのお越しをお待ちしております」

服も買い終わってしまった。もうやることがない。どうしよう……。武器とか見たいな。

「レン。これからどうしようか」

「そうですね……。せっかく此所まで来たのですから、他のものも見ておきましょう」

「じゃあ、武器とか見て見たいんだけど……。いいかな？」

「わかりました。武器屋にご案内しましょう」

「というわけで、武器屋の前にやって来ました」

「ジュン様。誰に説明してるんですか？」

「気にするな。気にしたら負けだ」

「はあ、そうですか」

武器屋は見た目、ただのボロい店で、看板に武器の絵が描かれている。ゲームに出てきそうなほどにベタベタな武器屋だ。

「いらつしゃいませ」

店に入ると案外普通の女性店員に迎えられた。僕としては、頑固親父がカウンターにどっしり構えてるのを期待してたんだけどな。

「何をお探ですか？」

「別に目的があつてきたわけじゃないから、適当に見ててもいい？」

「はい。構いませんか？何かご質問があれば遠慮せずに聞いてくださいね？」

親切な店員さんの営業スマイルに見送られ、店の奥に進む。

「おお！武器がいっぱいだ！」

「武器屋ですから」

奥の方にある武器はデカくて物々しい物ばかりだ。

先ずは手元に置いてあるナイフを手取る。

むむ、中々良いナイフだな。切れ味も良さそうだ。それに飛び出し式だし。

「ジюн様。そのナイフにはルーンが刻まれているようです」

レンの言った通り、柄の部分に刻印が刻まれている。

この世界にはルーン文字が存在し、それを武具に刻むことで様々な効果を付加することができる。

このナイフに刻まれているのは斬撃強化だ。これに魔力を通せば、人に因つては鋼をなぞるだけで切ることも可能だろう。

「レン。お金はどれくらい残ってる？」

「金貨百枚程です」

多いなおい！

「ヴラド様曰く、『必要経費』だそうです」

ヴラドの奴、親バカになりそうだな。

「まあ、それだけあればこれも買えるな。レン、これ持ってた」

レンにナイフを手渡し、他に良いのがないか探す。
ん？これもいいな。

次に僕が手に取ったのは二メートルはあろうかという巨大な剣だ。
分類としては、大剣だと思う。

え？何故僕がこんな巨大な剣を持てるのかだって？そんなの決まってる。魔力で強化してるからだ。というか、僕も持てるとは思わなかった。この分なら軽く振り回すことも可能だろう。しかも、これにもルーンが刻まれており、効果は重量加重だ。

「これも買いだな」

「買うんですかっ！？」

レンが驚いている。驚いている顔も可愛いなあ……。

「買うよ？ああ、これは持てないだろうから、ここに置いとくね？」

置いた瞬間にズシン！と音がしたが気にしない方向で。

「さて次はどれにしようかな」

……十分後……

「これ全部ください」

カウンターに置いたのは、ナイフに大剣に日本刀に片手剣に両手剣、後は投げナイフが数本……。

「これ……、全部ですか？」

流石に店員さんも呆然としている。

レンもどことなく呆れているようだし……、次くるときは自重しよう。

……できたらの話だけだな。

「じゃあレン。お会計よろしく」

「畏まりました。ジュン様」

レンが会計を済ましてる間に魔術を使い、闇のゲートを開く。そこに武器をしまった。

「ジュン様。いつの間にその様な魔術を？」

「部屋で読んでた『誰でもできる下級魔術』闇属性編』」に載ってた」

「そ、そうですか」

この世界の魔術は、下級魔術は無詠唱で、中級魔術は魔術名のみで発動可能だ。闇のゲートは下級魔術なので、イメージさえできれば、発動出来るのだ。しかし、上級魔術は呪文を詠唱する必要があるし、発動出来るのも一流の魔術師のみだ。

僕も中級魔術に慣れたら、上級魔術に挑戦するつもりだ。

「ありがとうございました」

「さて、今日はもう帰るか」

「そうですね。目的は果たしましたし……」

よし。じゃあ帰ろうか。そう言おうと口を開いたときだった。

「おい嬢ちゃん！ぶつかっておいて、そりゃねえんじゃねえか？」

「ぶつかってきたのはアナタの方。わたしには謝る理由がない」

……何なんだろうね。このベタなイベントは……。

怒鳴り声の聞こえてきた大通りの方に目を向ける。そこにいたのは正しくゴロツキAと形容すべき阿呆な男と見た目十四歳前後の獣人の女の子。

これは助けるべきかな？てか、何処の世界でもああゆう輩はいるんだねえ。

「レン。ちょっと行ってくる。レンはここで待ってて」

「あ、ジュン様！お待ち下さい！ジュン様！」

レンの静止の声を聞こえなかったことにして走り出す。

さて、久し振りの喧嘩だ。身体が鈍ってないか調べるのには丁度いい相手だ。

……一応言っとくけど、喧嘩好きじゃないからね？

第五話 一方的な喧嘩？

side 獣人の少女

今日は本当にツイてない。朝起きたら、寝違えてたし、朝ご飯はお茶漬しか用意してくれなかった。

同じ孤児院にいる同い年の男の子にイタズラされて、全身泥まみれになったときは、コイツ全力で殴ってやろうかと割と本気で悩んでしまった。

でも、お昼ご飯にラーメンを食べさせて貰ったときは、今日の不幸はこの瞬間の為にあったんだ。そう思えば、今日一日、幸福に過ごすことだって出来たのに……、なんでわたしはこんなに不幸なんだろうか。

シスターにお使いに行ってきた？お釣は好きにしていいいわよ？と言われたときに気付けば良かった。これは次の不幸の前触れなんだと……。

「おい、嬢ちゃん！痛えじゃねえか！ああっ！？」

今、わたしの目の前には頭のハゲた、体だけは無駄にデカイ人間のオッサンが怒鳴っている。

怒っている理由はわたしがぶつかったのに謝らなかったかららしい。このオッサンからぶつかって来たのだが、大人なわたしはすぐに謝った。しかし、このオッサン、わたしがきちんと謝ったというのに、誠意が足りねえとか肩がイテェから治療代払えとか言ってきたので、流石のわたしも頭にきてしまったのは仕方がないことだと思う。

「わたしはきちんと謝った。それに貴方には治療する必要性を感じ

られない」

シスターから聞いたのだが、わたしは本気で怒ると必要最低限の言葉しか発しないらしい。

ということは、今のわたしはよっぽど頭にきているのだろう。

「おい嬢ちゃん！ぶつかっておいて、そりゃねえんじゃねえか？」

「ぶつかってきたのはアナタの方。わたしには謝る理由がない」

ホントにム力つくオッサンだ。シスターに手を出されない限り、暴力を振るうことを禁じられていなければ、今頃顔の骨格が変わるくらいぶん殴ってるところだ。

「物分かりの悪い嬢ちゃんにはオシオキが必要だなあ！？」

ニタニタと下品な笑みを浮かべたオッサンが腕を振り上げた。

これでわたしは正当防衛という名目でこのオッサンを思いっ切りボコボコにできる！

「女の子に暴力を振るうなんて赦されることだと思ってるの？バカなの？死ぬの？」

と思ったら、殴られる瞬間、誰かがいきなりわたしの目の前に現われて、オッサンの腕を掴んだ。

「ぐああッ！な、なんだオメエはッ！」

「ねえ君、怪我はない？」

オッサンの問い掛けを無視して、わたしに話しかけてきた人は、こ
こら辺では滅多に見ない黒髪で、わたしより二三才程年上だと思わ
れる、女の子の様な綺麗な顔をした男の人だった…………。

s i d e 潤

この糞にも劣るクズ野郎の腕をスイカを破壊することの出来る握力
で握り締め、獣人の女の子に声をかける。

「ねえ君、怪我はない？」

「あ…、は、はい。大丈夫です…………」

何故か顔を赤くしながら、慌てた様子で返事をしてきた。
やはりこの変態ロリコン野郎の腐った視線に耐えられなかったんだ
ろう。可哀相に…………。

「おいッ！聞いてんのか！？このクソガキがあッ！！」

チッ！何だコイツ、僕の許可もなく喋りやがって！耳が腐る。

「放セッつつてんだろうが！クソガ

「黙れ」グアアッ！！」

さつきから耳障りな音を発しているモノの腕を捻りあげる。

「いいか？お前は金輪際、一切その不愉快な音を発する汚らしい口を閉じる。耳が腐る」

「なんだとゴラァ！！」

「聞こえなかったのか？黙れと言ったぞ。……ああ、そうか。所詮は家畜以下のゴミ虫でしかないキサマには、人間様の言葉が分からないのか。悪かった。出来もしないことを命じてしまった。なに、気にすることはない。できないのならば、物理的に黙らせるまでだ」

「オレをバカにしやがって……、もう許さねえぞデメエツ！！」

ゴミ虫が僕に掴まれていない方の腕を振り上げた。

「死ねえッ！！」

そして、振り上げた腕を掛け声とともに突き出した。

「そんなんじゃ死ぬ訳ないじゃん」

僕はゴミ虫の腕を掴んでいない方の腕、つまり右手でゴミ虫の拳を受け止めた。

「な、バカな！？」

「阿呆。この程度のことではいちいち惚けるな。死ぬ気でこい。でないと、死ぬぞ」

「ガッ、ガアアアアア!!」

右手で握ったゴミ虫の拳を魔力で強化した握力で砕いた。

「じゃあな。来世では真つ当な人間になれるよう祈っとけ」

魔力による強化を最低限に抑え、顔面を全力でぶん殴る。

「ぶぎゅるぐハアッ!!」

ゴミ虫は奇妙な奇声を発しながら、後ろにあった店の壁にめり込んだ。

side 獣人の少女

わたしの目の前に現われた男の人は、オッサンをぶん殴り、後ろの壁にめり込んだのを見て、言った。

「ちょっとやり過ぎちゃったかな」

「ちょっとじゃねええー!!」

いつの間にか集まっていた野次馬の人たちもそう思ったらしい。しかし、声には出さなかった。

「ジュン様。やり過ぎです」

「別にいいじゃん。さっき買った武器は使ってないし、死なない程度の威力でわざわざ殴ったんだから」

あの男の人と話しているのは、淡い水色の髪で白いワンピースを着た女の人だった。

綺麗だな。わたしもああいう風になれたらいいな。

「僕の名前は潤。こっちはレン。良かったら、君の名前を教えてくださいませんか？」

「え？あ、はい。わたしはシーナといいます。あの、ありがとうございます。助けてくれて……」

「気にしなくてもいいよ。僕がシーナを助けたいと思って勝手にやっただけだし。あ、シーナって呼び捨てでも大丈夫？」

「ふえ？は、はい！呼び捨てでいいです」

年上の男の人にシーナって呼ばれるのは初めてだ。

……意外と恥ずかしい。

「あ、あの！お礼をさせてください！」

「え？でも……」

「ジュン様。ここは大人しくお礼を頂いてはどうですか？」

「レン。そうは言ってもだな……」

「しかし、このままではこの娘もおさまりがつかないでしょう」

このジュンと名乗った男の人は、レンというらしい女の人の提案に悩んでいるみたいだけど、やがて納得したのか、うんと頷き、

「それじゃあ、今度ここにきたときにこの街を案内してもらおうかな」

「え！？そんなことでいいんですか！？」

「うん。構わないよ？お金には困ってないし、美味しい物だって毎日食べられる。読みたい本だって幾らでもある。今の僕が困るとしたら、この街の地理に明るくないぐらいしか思いつかない」

やっぱり裕福な家庭の人なんだなあ。

それに、この街の地理に詳しくないってことは、余所から来た人だっていう証拠、次くるときがいつ頃になるかわからない。

「あの、わたし、ここから東に行ったところにある孤児院に住んでるんです。今度遊びにきてください。何もないところですけど、精一杯もてなしますから」

「うん。分かった。遊びに行くよ。近いうちにね。お礼はそのときまでとつとくよ」

そう言ってジュン……さんは、微笑んだ。

「さて……、今度こそ帰るか」

「そうですね。そろそろ夕飯の支度をしている筈です」

「そうだね。夕食が楽しみだよ」

その後、獣人の少女……シーナと少し話をした後、別に別れ、城に帰る途中だ。

シーナは十四歳になったばかりの少女で、身長は百四十五cm程で、髪は金髪、瞳はエメラルド。中々の美少女だ。因みに猫耳。

「ジュン様？どうかしましたか？」

おっと、考え事をしていた所為で、レンに心配させてしまったようだ。

「ん。なんでもないよ。ちょっと考え事」

「先程のシーナという少女のことを考えていたんですね？」

……鋭いな。主人の考えていることがわかるとは、流石はレンだ。これが一流のメイドの嗜みというヤツなのかっ！？

「ジュン様。さっきから考えていることがダダ漏れですよ？」

……あれえ？マジですか？

「マジです」

………さいですか。

うう、レンの視線が冷たい気がする。

しょうがないじゃないか！僕だって男なんだから、女の子のこと考えたって！

………これからは自重しよう。はあ………。

第六話 勇者現われる

「ジューン様。勇者様が到着したようです」

「わかった。勇者は何処に通すの？」

「玉座の間です」

「了解」

僕がこの世界に召喚されてから、一週間が経った。一日中本を読んだり、魔術の練習をしたり、戦闘訓練をしたり、そんな風に日々を過ごしていたのだが……、今日は何時もとひと味違う。何故なら、勇者が魔王、つまり僕に会いに来たのだ。

ドラ。工的に考えるなら、勇者がラスボスである魔王を倒しに来たと考えるのが普通だが、此処はファンタズマ・ゴリア。過去に勇者と魔王が強力して闇の帝王を打倒した世界だ。

魔王は勇者の敵ではないことをこの世界の人達は知っている。よつて、勇者と魔王は平和と協調のシンボルであると言える。

僕と同じ様にオリジンから召喚された勇者は、魔王である僕に挨拶に来たのだ。わざわざ来て貰ったのだから、失礼のないようにもてなす必要がある。

……どんな人なんだろうか。良い人だといいなあ。

そんなことを考えながら、玉座につく。

過度な装飾はなく、いたってシンプルな造りの玉座だ。

ファイ。ーエ。プレムなら、玉座を制圧すればマップクリアだな。

あ、けど勝利条件が敵全滅とかターン防衛なら玉座ってあんまり関係ないんだけどね。まあ、ライフ回復したり、回避率上がるのは有り難いけどな。

「ジュン様。勇者様が入室するので、そろそろこちらの世界に戻ってきて下さい」

「レン。最近さ、遠慮がなくなってきたくない？」

「気の所為です」

「ああ、そう」

「……絶対ウソだ。

ギギギギギイ……」。

扉が開いていく。

どうやら、勇者が入ってくるらしい。

居住まいを正し、扉を見据える。

扉から入って来たのは、

「あー！潤じゃねえか！久し振りだな！」

「あれ？黒桐君？え？あれ？なんで？」

エクスクラメーションマークとクエスチョンマークだらけの男女のペアだった。

男は銀髪に紅い瞳、俗に言うアルビノ体質というヤツだ。

女は栗色の髪に琥珀色の瞳をしている。

「……クラスメートかよ！」

男は荻島

尚輝。

女は北河

薫。
きたがわ かある

勇者が見知った二人だったことに若干不満を覚える。せめて、荻島だけでもチェンジで頼む。

「ジューン！会いたかったぜー！」

そう言って駆け寄って来るバカー人。

僕も荻島に向かって走り出す。

「ジューン！」

「荻島アアツ！」

僕は右拳にありったけの魔力を込める。

「衝撃のお……」

身体を回転させることにより、遠心力を得る。そして……、

「ファーストブリッドオオオー！！」

必殺の一撃を駆け寄ってきたバカに繰り出した。

「アガア！」

荻島は妙な声を出しながら、北河の足下まで吹っ飛んだ。

「お、荻島君！大丈夫！？」

「イツテ……」

倒れ伏した荻島に労りの声をかける北河。しかし、荻島は僕の必殺の一撃を食らったというのに平然と立ち上がった。

バ、バカな！僕の拳を食らってあの程度だと！？あ、有り得ない……。

荻島は徐に懷に手を突っ込み、あるモノを取り出した。それは……、

「マフィンが無ければ即死だった……」

黒コゲのマフィンだった。

というかアレはホントにマフィンなのか？魔力の籠った一撃を受けてヒビ一つ入ってないってどんだけ硬いんだよ！？

「あ！あれは昨日荻島君が作ったマフィン！……まだ処分してなかったんだ……」

そうか。荻島の作ったモノなら納得が出来る。

調理実習の授業で、どれだけやっても全ての料理を炭化させ、ダイヤモンド並みの硬度にした話は今では伝説にまでなっている。

「それにしても、感動の再会だったのに……、まさかシエルブリッドを繰り出してくるとは思わなかったぞ」

「五月蠅い。勇者が来るって聞いて、どんなのが来るのか結構楽しみにしてたんだぞ？そしたら実際に来たのはクラスメートの二人……。シエルブリッドバーストを出さなかっただけマシだと思え」

「あの、ごめんなさい」

何故か北河が謝ってきた。恐らく、僕が二人が来たのが不満だったのを気に病んだのだろう。

「いやいや、北河はいいんだよ別に。問題なのはコイツだけだから。」

てか、なんで二人も召喚されたんだ？勇者は一人じゃなかったのか？」

「これには、その……、あまり深くはないけど理由があつて……」

ふむ……。大体想像は出来ているが、一応聞いておこう。

「そう。あれは、潤と別れて数分が経過した後のことだった……」

「つてお前が言うのかよ。つーか勝手に回想シーンに突入するなよ」

ハア、ハア、ハア……。

「ヤヴァイ！このままじゃ遅刻しちまうっ！！」

オレは潤と別れた後、バイト先に全速力で走っていた。

「うーん……。しょうがない。ショートカットすつか」

そう決意したオレは、裏路地を走り、時には屋根の上を走った。その甲斐あつてか、なんとか安全圏内に滑り込むことに成功した。

「よっしゃあー！ここまでくれば、歩いても間に合うな」

遅刻せずに済むことに安堵していると、横道から北河がやってきた。

「あれ？荻島君？どうしたの？こんな所で……」

「オレはバイト先に向かつてる途中だ。北河こそ、なんでこんな所にいるんだよ」

「私は最近できた、パフェが美味しいって評判の喫茶店に行こうと思っただけだよ」

「そういえば、北河は甘いモノが好きなんだった。オレもだけど。」

「それ多分オレのバイト先のことだと思うぞ？店の名前言ってみよう」

「えっと……。確か、喫茶『ユートピア』だったかな？」

「やっぱりウチの店だな」

「え！？ホントに！？」

「おう。マジだぞ？」

「あの、実は私……、道がわからなくて、一緒に行ってもいいかな？」

「別にいいぞ？」

「ホントに？迷惑じゃない？」

「全然。それより早く行こうぜ」

「うん」

こうして、北河と一緒にバイト先にいくことになったのだが、いざ歩きだそうとしたその瞬間、いきなり足下が光出したのだ。

「うをつ！？」

「きゃっ！？」

一瞬の浮遊感の後、気付けば、そこは異世界だった。

「ということがあったんだ」

「つまり……、今の話を要約すると、北河はお前の召喚に巻き込まれたと？」

「そうなるな」

「そうゆうことになるのかな？」

「結局、お前の所為じゃねえかー！ツ！」

「おうつ！？」

予想通りの結末だったことにビックリだ。
それに、北河を巻き込んだことにはらが立つ。

「こ、黒桐君、落ち着いて……、私なら大丈夫だから」

「……本当に？」

「うん」

「……わかったよ」

北河も随分とまあ、お人好しなことで。いや、もしかしたら、荻島とそのことについてはとくに話し合って、結論はでているのかもしれない。

「でだ、潤が此所に居るってことは、潤が魔王なんだよな？」

「うん」

「後ろの女の人は誰なの？」

そういえばレンのこと、紹介してなかったな。

「僕専属のメイドで、名前はレン。レン、察しはついているだろうが一応紹介しておく。コイツは荻島 尚輝でこっちは北河 薫だ。因みにクラスメートでもある」

「お初にお目にかかります。ジュン様専属のメイドのレンと申します。宜しく願い致します」

「オレは荻島 尚輝だ。宜しくな？」

「私は北河 薫です。こちらこそ、宜しくお願いします」

「それで、二人はこれからどうするんだ？」

「「どうするって？」」

あ、ハモった。

「二人は僕に会いに来たんだろ？もう目的は果たした筈だ。それとも、何日間か此所に滞在するのか？」

「おう。三日ぐらいこっちに居ることになってるぞ？」

何で疑問形？

「あと、此所に居る間、観光でもしてくるといって言ってたよ？」

こっちも疑問形かよ！

「で、何処に泊まるんだ？」

「「「」」」

……え、マジ？

「本当ですよ。ジュン様」

「そんな話聞いてないよ……」

「今朝、お食事中にお伝えした筈ですが……」

そうだったけ？

……… そういえばそんなこと言ってた気がする。

「潤って、意外とそうゆうところ抜けてるよな」

「うん。そうみたいだね」

……… そこ、五月蠅いぞ！

「それじゃ、今日は疲れたろ？もう休むといい」

「なぐんかもの足りたいけど、今日は潤の言う通りにするか」

「そうだね。私も疲れちゃった」

「では、お二人の部屋までご案内しましょう」

二人はレンに付いていった。

……… 明日からいろいろと忙しくなりそうだな。いろんな意味で………。とりあえず、明日はザナルカンドの案内でもしようかな？シーナとの約束もあるしね………。

第七話 魔王の休日

「潤、模擬戦が……、したいです……」

今の時刻は午前十時、荻島と北河が来てから一日が経過している。午後からはザナルカンドを案内する予定で、それまでは各自自由行動となっている。

北河は趣味のお菓子作りをする為に厨房にいる。その際、『黒桐君、厨房を使いたいんだけど……、ダメ……かな?』と上目遣いで懇願された。北河のこの科白にノックアウトされた僕は、二つ返事で了承した。

……も、萌えてなんかいないだからねっ！か、勘違いしないでよねっ！

……ゴメン……、やってみたかったただけなんだ。だからあまり気にしないでくれると助かる……。

まあそんな訳で、北河は厨房にいる。因みにレンも一緒だ。

何故レンも一緒なのかというと、北河にオリジンのお菓子の作り方を教わる為らしい。

魔王城に居るコックは、デザート関連はあまり得意ではないらしく、あくまで“それなり”のレベルでしかないんだとか。作り方を教わるにしても、コックたちは料理しに城まで来るので、仕込みの人以外はとっとと帰ってしまふ。居ない人に教わることはできないので、休みの日に独学でやっていたらしい。

そこで、オリジンのお菓子に詳しい北河に教えてもらおうと考えたんだとか。

北河も同じ趣味の人がいて嬉しいのか、『いいですよ？一緒に作りますしう』と即答した。

僕としても、レンに友達ができるのは嬉しいので、上機嫌で読書を楽しんだいたのだが……、コイツは一体何がしたいんだろうか？

「だから模擬戦がしたいんだよ」

「疲れるからヤダ」

「そんなこと言わずにさあ、なあ頼むよあ」

そう言いながら、僕に纏わりついてくる荻島。

「……キモい！」

「別にいいだろう？なあ頼むよあ……。いいって言うまで纏わりつくぞ」

「わかった。わかったから、さっさと離れろ」

コイツとはこうゆう掛け合いをすることが多く、一部の女子には『やっぱり尚輝×潤でしょ！』とか『あたしは潤×尚輝がいいと思うの』などと噂され、同人誌のネタとして書かれそうなこともあった。………全力で阻止したけどな！

「で、模擬戦するのは別にいいんだけど、いや良くないけども、何でやりたいんだ？」

「今のオレがどれくらい強いのか確かめたいんだ」

急に真剣な表情になるなよ……。しょうがない。僕も真面目に対応してやるか。

「やっぱり……、北河のことか？」

「やっぱ気付いてたか……。そうだ。北河が召喚されたのは……、オレの所為だから……。せめて北河のことを守れるくらいには強く成りたいんだ。……オレにできるのは身体を動かすことだけだからな」

「頭悪いもんな」

「うるへー」

……。まったく。どういつもこいつもお人好しばかりだ。

「で、模擬戦だけど……。素手でやる？それとも模造刀でも使うか？」

「潤も武器買ってたんだろ？なら使わなきゃ損ってもんだぜ」

「わかった。じゃあ武器持参で中庭に集合だ。魔力を使うのはアリだが、魔術はナシだぞ？後片付けが大変だからな」

「それでいいけどよ……。何で練兵場使わないんだ？」

「ここから三十分歩くことになるが……。それでもいいのか？」

「さあ潤、中庭に行くぞ！」

「変わり身早いなおい……」

「中庭って結構広いんだな！」

「この城では狭い所の方が少ないからね。中庭くらい広くて当然なんだろうな」

中庭は荻島の科白からわかるように割と広い。サッカーの試合ができるぐらいかな？

これなら模擬戦するのに支障はない。障害物も少ないので問題もない。

「それじゃ……、早速始めようぜ！」

荻島が持っているのは両手剣だ。R・V・Eの主人公が持っていた剣に似ている。

「あれ？潤……。お前武器はどうした？もしかして……持ってくんの忘れたのか？」

荻島は僕が何も持っていないことに漸く気付いたようだ。

「そう慌てるなよ。今出すから……」

武器を取り出す為に闇のゲートを開く。

「うおっ！？なんだよソレ！？何かの魔術か？」

「そうだ。この闇のゲートの中に武器を入れてるんだ」

僕は闇のゲートから武器を取り出した。それは……

「な、ななななんだよそのバカデカイ剣は！？有り得ねえーよ！
！潤よりデケエじゃねえかつ！！」

「ふっふっふ……。どうだ！凄いだろ！まるでF。TEのバーサー
カーの斧剣みたいだろう？」

「そういうことを言ってるんじゃないよ！！そんなバカデカイ剣を
受けたらオレの剣が折れちまうだろーがつ！！お前はオレを殺す気
か！？」

「……………え？」

「何だよその『今更気付いたの？』的な顔はっ！！なんなんだよ！
？お前はオレのことが嫌いなのか！？そうなんだな！？」

「さて、冗談はここまでにして……。ほら、この両手剣で相手して
やるからさっさと構えろ」

ギャンギャン騒いでいる荻島を放置して、闇のゲートから両手剣を
取り出し、構える。

荻島は『なんだ……。冗談だったのか……。……………冗談……。なんだ
よな！？信じていいんだよな！？』と未だにぶつくさ言っていたが、
漸く武器を構えた。

「準備はいいか？」

「おう！いつでも来い！」

「よし！行くぞ！」

side
レン

ジュン様がこの世界に来てから大体一週間経ちました。

ジュン様は、この一週間でこちらでの生活にも慣れたご様子で、とても安心しました。初めてお目にかかった時は、『このような方が立派な魔王様としてやっていけるのだろうか？』などと心配していましたが、どうやら杞憂だったようです。

ジュン様はとても強い力をお持ちです。しかし、ジュン様はその力に見合う強い心と器をお持ちです。

そして、そんなジュン様に御仕えすることができて、私はとても幸せです。

「レンさん。そろそろ焼きあがるみたいですよ？」

ジュン様のことを考えていたからか、ぼくっとしてしまったようです。……次からは気をつけましょう。

「うわぁ。良い匂いですね！とっても美味しそう！」

この会話からわかるとは思いますが、一応説明しておきましょう。今私たちは厨房でお菓子を作っている最中です。カオル様が『まずはクッキーを作ってみましょう』と言ったのでクッキーを作ってい

るのです。

焼き上げたクッキーをオープンから取り出すと、とても甘い香りがあります。

「良い出来ですね。これならばジユン様にお出ししても問題はないでしょう」

「そうですね♪早く荻島君と黒桐君の所に持って行きましょう!」

カオル様もこのクッキーはとても上手にできたと上機嫌です。しかし、ジユン様とナオキ様の居場所が判明していません。

……このままではジユン様にこのクッキーを食べて貰えない。どうするべきか……。

ガキン!キンツ!ガン!ドゴン!

何処からか、妙な音がしてきました。

窓の方から聞こえてきたので、カオル様と一緒に恐る恐る近付いて見ると、そこには……中庭で戦っているジユン様とナオキ様が居ました。

どうやら模擬戦を行っているようです。

キンツ!ガキン!ドゴン!ガキン!キンツ!

御二人とも、一步も引かずに切り合いをしています。

……凄い。平和な世界から来たのに御二人とも真剣であるような激しい戦闘ができるなんて!

しかし、その戦闘も永くは続きませんでした。何故なら、ナオキ様の動きが止まったからです。

ジユン様も怪訝に思ったのか、剣を降ろしています。あ!ナオキ様

が剣を放り出して走り出しました。いったい何処に向かっているのでしょうか？とても気になります…………。

side 尚輝

ムムツ！この甘くて香しい匂いは！

此所は中庭、今まで潤と模擬戦をしていたんだが、スッゲー良いニオイが上の方からしてきたからつい動きを止めちゃった。

「おい、どうかしたのか荻島」

「スマン潤…………。模擬戦は中止だ」

「ハア！？何言ってた？ってちよつと待てよ！おい！」

スマン。今はそれどころじゃないんだ。

今は…………、この香りの下へ行かなくちゃなんのだ！

全身に魔力を通して更にスピードを上げる。

オレは今、風になる！

やがてこの匂いのする部屋が見えてきた。そこは……………

「あれ？荻島君どうしたの？」

厨房だった。此所には北河と潤のメイドのレンとかいう人がいた。いや、今はそんなことを考えている場合じゃねえ！

「北河！この甘い香りはなんだ？」

「え？クッキーだけど……、それがどうかしたの？」

「くれ」

「え？」

「だから！クッキーを下さい！お願いします！」

「う、うん……。別にいいけど……」

「ヨッシャー――！！」

「きゃっ！」

おっと、嬉しくてつい叫んじゃったぜ……。

ま、しょーがねえよな。嬉しいもんは嬉しいんだし。

それから少し経ってから、潤がやってきた。オレが途中で勝手に抜け出したから少し不機嫌そうだったが、レンさんから手作りクッキーを貰って嬉しそうにしていた。

ふっ……。現金な奴だぜ。

第八話 なんかかんやでギルドにやってきた

「この孤児院にシーナが住んでるのか」

「その筈です」

ここはザナルカンドの東に位置する孤児院だ。前にも言ったように、シーナにこの間のお礼をしてもらいに来たのだ。

因みに今は午前十時三十分だ。

え？模擬戦した日の午後から行く予定じゃなかったのかって？

あの後、模擬戦も中途半端に終わったから仕切り直して切り合ってた、いつの間にか三時になってて行くの止めたんだよ。で、今回は朝から行ってみようかなって気分になったから今こうしてここに居るのだ！

画面の前の皆さんもム力つくアイツをボコしてる間に時間を忘れないように気をつけましょう！

……あれ？何言ってるんだろ僕、電波か？

「結構綺麗なところなんだな！」

「そうみたいだね」

一緒に来ている荻島と北河は、何故か孤児院の綺麗さに感心している。

……この二人にとって、孤児院は廃れたイメージしかないのだろうか。

「二人とも、その科白は孤児院の人達に失礼だろ？」

「ああ、わりい」

「ごめんなさい……」

うんうん。素直なのは良いことだ。

「じゃ、早速行ってみようか。何時までもこんな所でボケツと突っ立ってるわけにはいかないし」

「そうですね。善は急げと言いますし……」

「じゃあ早速行ってみよう。……ごめんください！誰か居ませんかー！」

コンコンとノックしながら大声で問い掛けると、はいー！という声が聞こえてきた。

扉の向こうではドタバタと忙しそうな音がする。……とてもコメディーチックな愉快な音だ。

数秒後には音が途絶え、こちらに向かって歩いてくる足音しか聞こえない。

「どちら様ですか？」

ガチャツ！という音と共に現われたのは、修道服に身を包んだシスターだった。

見た目は三十代前半、金色の髪を肩まで伸ばしている。身長は僕より低い。恐らく百五十ぐらいだろう。

柔和な印象を与える優しい笑みを浮かべている。

「あの……、ご用件は……」

「僕は潤と言います。こちらにシーナさんはいらっしゃいますか？」

「シーナのお友達ですか？」

「ええ、そうなります。といっても一度しかお逢いしていませんが……」

「そうなんですか……」

シスターは訝しげに僕ら四人を見渡したが、特に気にせず、『ここで待っていて下さい』と言い、扉を閉めた。

恐らくシーナを呼びに行ったのだろう。パタパタと走る音とシーナを呼ぶ声が聞こえる。

「す、すみません！お待たせしました！」

ボタン！と勢いよく扉が開き、息を切らせながらシーナが出てきた。

「やあ、約一週間ぶりだね」

「は、はい！お久し振りです！」

何故かは知らないが、緊張しているようだ。というかなんてテンパっている。

「ネコ耳だね」

「ネコ耳だね」

後ろの二人は猫耳に注目したまま動かないし、レンも干渉を決め込んでいる。

この場合、僕が落ち着かせないといけないのかな……。未だにテンパっているシーナを見て、溜め息を吐いた。

「ここが防具屋です。裏通りにある所為か、あまり人がこないんですが、質の良い防具を取扱っています。値段も手頃で一流の冒険者の人達の間では、穴場として知られてるんです」

あれからシーナを落ち着かせた僕は、荻島と北河との自己紹介を軽く済ませ、当初の予定通り道案内をしてもらっている最中だ。

飲食店から始まり、穴場の観光スポット、公園に図書館等の公共施設、更には賭博場の場所まで教えてもらった。

ついでに言うておくが、昼食は既に済ませてある。何故か好み焼き屋があつたのでそこで食べた。

久し振りに食べる好み焼きは旨かった。他の皆も満足していた。

シーナも『こんなに食べたの久しぶりです』と嬉しそうに笑っていた。

今は武具関係の店を回っている。

「それで、ここからまっすぐ歩くと大通りに行けるんです」

シーナを先頭にして歩き始まる。五分程歩くと、シーナの言う通り、大通りにでた。

「そして、真正面に見える建物が『ギルド』です」

「へー、ここがギルドなんだ」

『ギルド』とは、世界中の冒険者や傭兵が所属している組織だ。魔物退治や要人警護、魔物の巣くうダンジョンにのみ存在する特殊な素材を採ってきたり……、一言で言えば『何でも屋』だ。個人の依頼から国の依頼まで取扱っている。要するに金さえあれば、法に触れないこと以外なら何でもやってくれる。

「皆さんの案内して欲しい場所はここで最後ですね」

「結構時間かかったな」

「この国では二番目に大きい街ですから」

「じゃあ一番大きい街は？」

「オレたちが召喚された『オスティア』がそうらしいぞ」

「うん。王様が自慢してたもんね」

『オスティア』……。確かガリア共和国の王都で、勇者と魔王の末裔が治めている街だったな。

オスティアでは、勇者と魔王の末裔に王となる資格を与えられ、国民の支持を一番得られた者を国王とする風習がある。

僕が知ってるのはそれくらいで、この国で一番大きい街だとは聞かされていなかった。

「それで……、これからどうしようか、ギルドにでも行ってみる？」

「おお！それいいな！行ってみようぜ！」

建物の中は大勢の人で賑わっていた。

『ギルド』というと、屈強な男をイメージするが、実際はそうでもない。確かに見た目からして強そうな人もいるが、中には見るからにひ弱そうな男や妙齢の女性、狡猾そうな老人、いろんな人たちがいる。

種族も様々で、人間、獣人、魔族等々……映像で観せられないのが残念だ。

「とりあえず受付に行こうぜ！」

……相変わらずテンション高いなコイツ……。

「その意見には賛成だけど、もう少し落ち着きというものを持って、……さっきからソワソワしすぎだ鬱陶しい。ソワソワするなら僕から半径五メートル以上離れろ」

「……相変わらずの毒舌だな。それでいて五メートルという遠いのか近いのか判断に困る微妙な距離……、現実味がありすぎて本気で言ってるのかと勘違いするじゃねえか……」

「本気だけど」

「……………M A・Z I・D E!？」

「本気と書いてマジだ。というか発音がカタカナじゃなくてローマ字なのは何故だ？ただでさえバカなのに余計にバカっぽく見えるぞ」

「何でそこまで言われなくちゃいけないんだよ……、泣くぞ!？」

「泣くな、気持ち悪い……………」

「ヒドくねっ!？お前はアレか!？真性のサディストかつ!？というかそんなにオレを苛めて楽しいのか!？」

「え?……………特には」

「なんだよソレ!？苛められ損じゃねえか!」

「どんな損だよそれ……………」

何かコイツで遊ぶと面白いんだよなあ。
リアクション激しいし……………

「何でいつもオレを苛めるんだよ!？オレはマゾじゃねえから辛いだけなんだぞっ!？」

「僕は一日一回はお前を苛めることを日課にしている」

「イヤな日課だなオイ」

「大丈夫、冗談だ。……………多分」

「今……、最後の方に小さく『多分』って言わなかったか？」

耳のいい奴め……。

「気のせいだよ。……………きっと」

「オイ！今度はちゃんと聞こえたぞ！？『きっと』って言ったろ！
今絶対言った！！」

さて……、隣りで喚いているバカはほつといて、さっさと受付に行こう。

side カオル

「相変わらず仲いいね、あの二人」

私の目の前では黒桐君が荻島君をからかって遊んでいる。

「あれは……、仲がいいのでしょうか……………」

「多分違うと思います……………」

レンさんとシーナちゃんは何故か呆然とした表情で二人のやり取りを眺めている。

「黒桐君は照れ屋さんだから、ああやって荻島君で遊んでるんだよ」

「ジユン様はツンデレですか!？」

「というかナオキさん“と”じゃなくてナオキさん“で”遊んでるって分かって言ってるのにあれが仲良く見えるのはオカシイと思います……」

どうしてレンさんとシーナちゃんは疑ってるんだろう?というかレンさんの反応が変だと思うのは私だけなのかな?

「あれはあれで二人共楽しんでるんだよ。学校でもよくやってたし、スキンシップって言うのかな?」

「イヤなスキンシップですね……」

「むしろイジメに近い気がします……」

「そんなことないよ。……ほら二人共受付に言っちゃったよ?私たちも早く行こうよ」

未だに納得していない二人の手を取り、黒桐君と荻島君の所に急いだ。

何やら後ろで北河たちが不穏な会話をしていたような気がするが、あまり気にしないことにする。……………否、不穏というか不可解というか心外というか、そんな会話をしていたような気がする……………。まあ良いか…………、気にしないでおこう。そんなことよりも問題なのは…………

「いらっしやいませ！冒険者ギルド、ザナルカンド支部へようこそ
」

この妙にテンションの高い受付のお姉さんだ。
ていうかナンなのその元気な売り子さんみたいなノリは！？
……………ナンだろう。何だか急に帰りたくなってきた。ていうか相手するのメンドクサッ！！

第九話 何か雰囲気違っよね

「今現在、我がギルドではギルド新規加入者を募集中です！」

「……何かレンタルビデオ店の会員登録の勧誘みたいだな」

まさかギルドの受付嬢ににこやかにギルド参加を促されるとは思わなかった。

ていうかナンなのこのノリは！？

ギルドの受付嬢がしていいテンションじゃないと思うんだが……。

……まあ今はそんなことどうでもいいか。取り敢えず、さっさと登録を済ませてしまおう。

「ギルドに加入したいんですけど……」

「はい、承りました。こちらの用紙にお名前をお書き下さい」

ギルドに加入すると言った途端に表情が引き締まった。営業スマイルを浮かべているものの、さっきまでとは雰囲気が違う気がする……。あくまで何となく、だけれども。

今までの態度は新参者に好印象を与える為の演技だったのだろうか……。

疑問に思ったが、今は登録が先だな、と思ったので軽く流して差し出された用紙に名前を書く。

この世界の言語は、召喚魔術の術式と併用して発動された翻訳魔術のおかげで喋れるし、文字を読むことはできる。しかし、文字を書くことはできなかった。考えてみれば当然のことだ。

翻訳魔術は本来、相手の言語を聞き、脳がそれを処理する際に自身自身の理解できる言語にすり替えるものだ。だが、召喚魔術と併用

することで術式がより複雑化し、自分の知らない文字すら理解できるようになる魔術へと昇華されたのだ。

駄菓子菓子、じゃなくてだがしかし、それらは元となる『言語』を見聞きすることで可能となる魔術である。要するに、翻訳する為には言葉を聞かなければならないし、文字を見なければ、読むこともできないのだ。

例えば、ここに小学生が一人居るとする。そしてこの小学生に英語を聞かせるとする。しかし、この小学生は英語がわからない。

そこでこの小学生に翻訳魔術をかけたでしょう……。そうすると、この小学生は英語を理解できるようになる。

次に英語を書いた用紙を見せてみる。すると、翻訳魔術のおかげでその英文を読むことができるようになる。

だが、この日本語を英語に訳しなさい、という問題はできなかった。つまり、未知の言語を日本語に訳すことができて、日本語を未知の言語に訳すことはできないということだ。

さて、今の説明でわかってもらえたと思うが、僕は文字を書くことができない……。

なので、僕はこの世界の文字を勉強する必要があった。

幸い、和訳は簡単にできるので、一週間でマスターすることができたのだ。

「これでいいですか？」

自分の名前を書いた用紙を渡す。

「ジュン」コクトウさんですね？コクトウさんのランクはFランクとさせていただきます。何かご質問はありますか？」

ランクというのは冒険者の实力を示すものだ。

ランクはFランクからE・D・C・B・A・S・SS・SSSラン

クまである。

ランクの上げ方って何だっけ？前にヴラドが言ってた気がするけど
思い出せない……。

ここは思いきって聞いてみるか。……説明が長くなるから面倒だけ
どな。

「ランクはどうやったら上がるんですか？」

「ランクを上げるには、ご自身と同ランクの依頼を10以上達成する
か、ランクが上の魔物を5体以上倒せばランクを上げることができます。
尚、Sランクになるには年に一度開かれる、ギルド主催の
武闘大会で優勝するか、Sランク以上の方の紹介により、ギルド指
定の魔物を5体、討伐していただきます」

「自分よりランクが上の依頼は受けられないんですか？」

「はい、同ランクの依頼しか受けることができません」

……身の丈以上の仕事はするなっただけか。

「他にご質問はありますか？」

「ありません」

もう聞かなくてはいけないことはない筈だ。
あってもまた聞けばいいしね……。

「では、これをお渡しします」

そう言うと、受付嬢はカウンターの下に潜りゴソゴソし始めた。

……何やってるんだ？捜し物……だと思っけど……。

「お待たせしました。こちらがジュン・コクトウさんのギルドカードとなります。ギルドカードは貴方がギルドメンバーである証となるので紛失しないように気をつけてください。もし、紛失された場合はお早めにギルドに連絡してください」

受付嬢に渡されたのは、名刺程の大きさのギルドカードだった。ギルドカードにはいつの間撮ったのか、僕の顔写真が貼られている。

ギルドカードは身分証のような働きをするカードで、この世界では身元不明の僕には大助かりのアイテムだ。

「あちらに依頼書がございますので、依頼を受ける場合は依頼書に同封されている受注申込用紙をこちらの受付までお持ち下さい」

受付嬢の指差す方向にはテーブルがあり、その上にランクごとに分けられた依頼書があった。

他にも幾つか同じようなテーブルが見える。恐らく、冒険者たちで混雑しないように配慮しているのだろう。

「またのご利用をお待ちしております」

受付嬢が礼をする。僕はそれを見て、後ろに振り返った。

「で、これからどうしようか？」

「手頃な依頼を請けて腕試しすんのが普通じゃね？」

「えー！メンドイ……」

「何の為にギルドに入っただんですか……」

レンが呆れたように言った。

「ゲームだったらちゃちゃっと依頼請けてAランクにはなるのにな」

「しょうがないよ。地道に上げていこうよ」

「まあそのうち頑張るよ」

「その言葉を信用できないオレがいる」

「うつさい！黙れ！！」

バカの頭を掴み、万力の如く力を込める。

「い、いだだだだだだだ！！？」

割と本気で痛がっているが関係ない。荻島が僕にツッコミを入れるなど、百年早い。

「痛い！いやマジ痛いから！オレが悪かったから、もう許してくれ
く……」

切実な願いっぱいなので仕方なく放してやる。

「ぐおおおお……。マジで痛かった……」

「だ、大丈夫ですか！？」

涙目になっている荻島をシーナが労る。

うん。やっぱりシーナは優しい良い子だな。

「黒桐君、こんなところで暴力を振るうのはよくないよ。私たち、すっごく目立ってるよ」

「気にするところはそこなんですか!？」

北河の科白にレンがツッコミを入れるとは……レンも少しは僕たちに馴染んできたのかな？

それはともかく、北河の言う通り、周りの人達が僕らを見ていた。

「見たか今の、アイツいきなりアイアンクローかましやがったぜ」

「おお！見た見た！かなり綺麗にキマってたな!!」

「ねえ？あの坊やたち可愛くない？」

「そうね。後で誘ってみようかしら」

「くつくくく……、面白いヤツがきたもんだな」

「おいみろよ！あのメイド、スッゲー美人じゃねえか!!」

「俺はあっちの茶髪の子がいい」

「何言っただよお前ら、向こうの獣人の女の子が一番に決まってるじゃねえか!!」

「このロリコンがあつ！！！」

……気になる発言は多々あったが聞かなかったことにしよう。取り敢えずあの三人組はボコるけどな。

「これじゃ依頼どころじゃないよね……」

「そうですね。というかこのままここにいたらいろんな意味で危険です……」

確かに北河の言う通りだ。いつの間にかカオスな空間と化しているギルドから抜け出さなくてはいけない。それにシーナの懸念も的外れなモノではない。このままでは危険だ。主に貞操とか。

「よし！脱出するぞ！！」

そうと決まれば長居は無用だ。未だに涙目になっている阿呆を引きずりながら、ギルドを後にした。

大急ぎでギルドを脱出した僕たちは、シーナが案内してくれた喫茶店で寛いでいた。

「いやゝ参ったね。まさかあんな騒ぎになるなんて……」

「そうですね……。ギルドを甘く見ていましたが、認識を改める必

要があるようです」

「どんな認識だよ!？」

「「さあ?」「」

「うわ!？何この主従！チョム力つく!！」

ふむ……。このまま荻島を弄りまくるのも一興だが、今はこれからどうするか話し合うべきだろう。

「これからどうする？ギルドはあんなだし、今日はもう帰る？それとも何処かで買い物でもする？」

「そうですね。このまま帰るのもつまらないし、何処かで買い物でもしたいです」

僕の質問に答えたのはシーナだった。

「そついや潤、防具は持ってたのか？」

「いや、持ってない」

防具なんてなくても、魔力を纏えば大抵の攻撃は効かない。だから買おうとも思わなかったのだ。

「え!？じゃあ丸腰で魔物と戦うつもりだったんですか!？」

「武器ならあるから丸腰ではないよ」

「防具は冒険者の命を繋ぐ大事な物なんですよ！甘くみちゃダメです！ー！」

……怒られた。

という訳で、僕たちは防具屋にやってきた。

中には、騎士が身に着けるような見栄えの良いフルプレートアーマーから正しく冒険者が身に着けるような軽い鎧まで展示してある。奥の方には衣服も置いてあるようだ。

「ジュン様、どのような防具にするか、御希望はありますか？」

「特にない。ゆっくり見て決めることにするよ」

「防具は冒険者の命綱ですから、ちゃんと『これだ！』って思えるような物を探して下さいね？」

「わかったわかった。ちゃんとじっくりくるモノを見つけるから」

妙に熱く語るシーナに少々辟易しつつも、慎重に選ぶ。

三十分程店を見て周ったが、中々良いのが見つからない。

……もう面倒だから適当に決めちゃおうかな？

でもちゃんとみるって約束したしな……。

「ん？」

「どうしたの？黒桐君」

隣りで一緒に衣服のコーナーを見ていた北河が問い掛けてきた。

「ごめん。ちょっと黙ってて」

目を閉じ、意識を集中させる。

……………そこか！

僅かに違和感を感じた。その方向に目を向ける。そこには余り手入れされてない鎧が積み重なっていた。

あたかももうすぐ棄てられるような鎧しか置いてないように見えるが、僕の目は誤魔化せない。

さつき感じた違和感……、否、魔力は確かにあそこから漏れている。

「店員さんあそこに置いてあるのは何ですか？」

「ああ、アレですか。もうすぐ廃棄しようと思っている鎧ですけど、それがどうかしましたか？」

「あそこから妙な魔力を感じたんですが……」

そう言つと、店員はほつと感心したように息を漏らした。

「流石はお客様、アレに気付くとは中々素晴らしい感性を持っているみたいですね」

「なんか見つけたのか？」

店員と話しているところを見てやってきたのか、荻島がこっちに近

付いてきた。

「ああ、あそこから妙な魔力を感じたから、そのことについて聞いてたんだ」

「ああ！なんか妙な感じがすると思ってたらアレだったのか！」

「お前も感じてたのか」

「おう！……ただ感じただけで、潤みたく場所を特定できたワケじゃねえけどな」

「そちらの方もお気付きになられたのですね。では、御覧になりますか？」

「ええ、是非」

「ご覧になるぜ！！」

妙な科白は吐いた阿呆は放っておいて、店員の提案に従った。

………それにしても、店員の雰囲気さっきまでと違う気がするのは僕の気の所為だろうか。

第十話 お金って大事だね

「これが、貴方達を感じた魔力の正体です」

店員が取り出したのは、黒いコートと白いコートだった。

よく見ると、確かに異様な魔力を感じる……。

「これがそうなんですか？」

「ええ、そうです。この黒いコートは名を『タナトス』と言い、『ダークマター』という特殊な金属を繊維状に加工し、闇属性の魔術師が魔力を練り込みながら編んだ、大変優れた防御力を持つコートなのです。続いて、この白いコートは名を『アイギス』と言い、『オリハルコン』をタナトスと同じく繊維状に加工して、光属性の魔術師が編んだ物です。こちらにも優れた防御力を持っています。詳細はこちらの取扱説明書をお読み下さい」

文庫本くらいの大きさの本を渡される。さっきの説明を聞いた後に読む気にはなれなかったので、闇のゲートに入れる。

隣の荻島は読もうとはしているが、三ページ程捲った辺りから、うーんうーんと唸り出した。どうやら知恵熱が出たらしい……。すぐに読むのを止めてしまった。

「それで御幾ら何ですか？」

レンが聞く。

「お客様は初めてこの店に来たにも関わらず、これにお気付きになられた……。なので今回は特別価格、二つ合わせて金貨百五十枚で

如何でしょう」

「え！？メツチャ高くなー！！？」

あまりの金額に荻島が驚愕する。

それもその筈、金貨一枚につき百万円……、百五十×百万で一億五千万円……。何か頭痛くなってきた。

「しかし、ダークマターとオリハルコンが使われているのですから、これでも安い方だと思われます」

「え！？マジで!？」

「ジュンさん、ダークマターもオリハルコンも滅多に市場に出回らない貴重な金属なんですよ？質にもよりますが、1キロで最低、金貨百枚の価値はありますから、むしろ良心的な価格ですよ」

「何だか金銭感覚が狂いそうだ……」

「わ、私も……」

北河も頭を抱えている。まあこんな話を聞いていたら頭が痛くなるのは当然だろう。

「如何致しますか？」

店員が催促してくる。

……安い方なら買ってみたいと思う。性能も良さそうだし……。問題は……お金だ。

「レン、幾ら持ってきてる？」

「前回と同じく金貨百枚です」

足りない……か。なら、どうするべきか……。

「よし、買おう」

「ジュン様、今は持ち合わせが……」

「わかってるよ」

「では何故……」

納得していないレンに、いいからいいからと手を振る。

「この代金は魔王城のヴラドに請求して下さい」

「「「「ハアア！」「」「」」」」

店員どころか、荻島達まで目を丸くして驚いている。
いろんな意味で面白い。

「潤、お前……、どんだけヴラドさんにタカるつもりだよ……」

「僕は使えるモノは使う派だから」

「そっいつ問題じゃねえ！！」

「ジュン様、それは私もどうかと思うのですが……」

うんうんと、他のメンバーもレンに同意しているようだ。

「お客様は魔王城に縁のある方なのですか？」

むむ！？客のプライベートを聞くとはなっていないな。まあ気持ちはわかるが……。

「約一週間前に召喚された新しい魔王だよ。以後宜しく」

「ええー！！！ジュンさんって魔王様だったんですか！？」

「あれ？言ってなかったっけ？」

「聞いてませんよ……」

そういえば一度もそんなこと言っていなかった気がするな。

「因みに荻島君は勇者様だよ？」

「そ、そうなんですか！？」

「おう！オレは勇者だ！！」

北河の追撃により、シーナは更に衝撃を受けたらしく、ガガンという効果音が聞こえてきそうなポーズをとっている。

いや、どんなポーズだよ！！とツツコミたくなるだろうが、そうとしか言い様がないのだ。

「それで……、代金の請求は魔王城のヴラド様でよろしいので？」

「ええ、そうして下さい」

ヴラドも魔王と勇者の防具なら必要経費だと思ってくれる……………ハズ。

「いいのかな……………」

「いや、よくねえだろ」

「ですよ〜」

後ろが何か煩いけど気にしてはいけない。気にしたら負けだ。……………多分。

「なあ潤！これ着てみようぜ！」

ふむ…………、着心地がいいかどうか確かめる必要もあるしな。あとサイズとかも。

という訳で、黒いコートに袖を通す。

「あれ？ピッタリだ」

「あ、オレも…………」

荻島も疑問に思ったらしい。着てみたらサイズがバッチリ合っていた、なんて偶然は滅多にないと思う。僕一人だけなら有り得たかもしれないが、二人となると、単なる偶然とは思えない。

「それはタナトスとアイギスが、お客様の体型に合わせたんですよ」

……地味に凄いな、このコート…。

「お似合いですよ。ジュン様」

「二人ともカッコいいですよ」

「けど白いロングコートって目立つよね」

レン、その言い方は誤解を招きかねないから止めてくれ。

シーナは相変わらず良い子だな。

北河は単純にコートにダメだしするな。ここは嘘でも似合ってるって言うところだぞ。

それにしても、なかなかの着心地だ。何と云えばいいのかはわからないが、こう……束縛されない感じがする。

コート自体の重さをあまり感じないし、動きが制限されることもない。

高い金を払った甲斐があるというものだ。……僕のお金じゃないけどな。

「有り難う御座いました。またのお越しをお待ちしております」

店員に見送られ、店を出る。

「いやゝ、良い買い物だったねゝ」

「実際にお金を払うのはヴラドさんなんだよね」

「潤はこういうところが不真面目なんだよねゝ」

皆が僕を白い目で見てくる。……何故だ？

「それがわからないから、私達は呆れているのですよ。ジュン様」

「ジュンさんはもう少し世間体というものを気にした方がいいと思います……」

失礼だな二人とも。僕は他人の心の機微とかに敏感なんだぞ？……多分。世間体だって気にしてると思うぞ？……少なくとも荻島よりは。

「はつきり言い切れないのは御自分でも多少は自覚している証拠ではありませんか？」

「な、なんだよ！？そんなことないよ！僕は何時だって自分のやりたいことを他人に迷惑を掛けないようにやってるだけだ……！」

微妙に答えになってないのはご愛嬌だ。決して慌ててるからではない。

「はあ……、ジュン様、貴方は誇り高き魔王なんですよ。それを……」

レンが説教を始めようとしたその時だった。

……ピンポンパンポン♪

何コノ音、デパートの迷子のお知らせを伝える前に出るチャイムみたいだ。ていうかこの世界にチャイムとかあるのか？

『善良なる市民の方々にお知らせします』

……どうやら本当に放送する前のチャイムだったらしい。
しかし、その“お知らせ”の内容は、迷子のお知らせよりもよっぽど面倒な内容だった。

『現在、商業都市ザナルカンドの北門に魔物を確認しました。距離は約三キロ、住民の皆様は魔王城、もしくは地下シエルターに避難してください』

「魔物の襲撃!？」

「魔王軍の主力が王都に合同演習に行っているこの時期に!？」

……どうやら、状況はかなり差し迫っているらしい。

『尚、冒険者の方々は北門に集合してください。これはギルドからの“命令”です。命令を無視した者はギルドのメンバー登録を破棄させていただきます。繰り返します……』

同じ内容の放送が繰り返される。

その内容は実質的な“脅迫”でしかなかった訳だが……。

「で、どうするよ。潤」

「どうするも何も……」

そこで一旦言葉を切り、苦笑いしながら振り返り、言った。

「行くしかないじゃん？」

行かなきゃ折角登録したのが無駄になるし、対人は訓練のおかげで
なんとかなるけど……、魔物相手はまだやったことはないから丁度
良いし、ね…………。

第十一話 戦闘開始!?

「皆さん！魔物はすぐそこまで来ています！係りの者の誘導に従って所定の位置に付いて下さい！」

北門には、既に冒険者の人達が集まっていた。
ギルドの職員が忙しく動いている。

「人、多いね。千人はいるんじゃないかな」

「ギルドの職員を合わせると……、千五百は居ると思いますよ？」

「まあザナルカンドの危機ですからね。この街に愛着を持つ者ならば当然でしょう」

「何のんびりしてんだよ！お前ら！！」

北河、シーナ、レンの三人にいきなり怒鳴る荻島……。三人共顔を
見合わせる。どうやら何故怒鳴られたのか分かってないようだ。

「三人共非戦闘員だろ？早く避難場所に行かなくていいのか？」

「私も一応ギルドに入ってるし……」

「私もです！！」

「私はジュン様のメイドですよ？」

三者三様の答えが返ってきた。というかレンだけ理由になってない

し……。

「武器もないのにどうやって戦うつもりなんだ？」

「……」

今日は買い物メインだった為武器は持ってきてない。

だが、僕は闇のゲートに武器を入れているので問題は無い。

「荻島君みたいに黒桐君から借りれば……」

北河の言う通り、荻島には両手剣を貸してある。僕が模擬戦で使ってたヤツだ。

「じゃあ聞くが、三人はどんな武器を扱えるんだ？」

「弓だよ？」

「グローブです」

「ほしき 箒を少々……」

「残念だけど、僕は弓もグローブも持ってない。後レンのは武器じゃなくて掃除用具だから！それで命懸けの戦いはさせられないから……」

「大丈夫です！仕込み箒ですから……」

「仕込み箒……」

「どんな敵でも真つ二つです！……縦に！！」

「縦かよ！？」

「勿論です！後ろからバツサリ逝きます！！」

「逝くの！？ていつか結局幕なんて持っていないから！？」

「ちっ！」

「メイドに舌打ちされた！？」

「往生際が悪いですよ！？ジュン様！」

「それはこっちのセリフ！っかい加減に諦める！」

「ではどうしろというのですか！？私にジュン様をおいて逃げろと？それこそ不可能です！！メイドが主人を見捨てられる筈がないでしょう！？」

レンが珍しく取り乱す中、一人カヤの外だった荻島がポツリと呟いた。

「なら、怪我した奴等の治療とかすればいいんじゃないか？」

もっと早く言って欲しかった……。

荻島の鶴の一声により、非戦闘員として負傷者の治療をすることになった北河とレン。

シーナは『よく考えたら、孤児院まで武具を取りに行けば良かったんです!』と言い、武具を取りに孤児院まで走っていった。

「では、魔物に門を破られる前に遠距離からの攻撃を行ないます! 遠距離攻撃のできる方は私の前に集合してください!!」

「どうすんだ? 潤」

「僕は一応魔術使えるから向こうに行こうと思う。そう言うお前は?」

「オレは接近戦が得意だから、門の外に行く」

荻島も魔術は使えるが、遠距離からちまちま攻撃するのが嫌らしい。僕も未だ上級魔術が使えないから物量で勝負することになるんだけど。

「じゃーな! 気をつけるよ!」

「お前がな!」

全く……。城壁の上で戦うんだから攻撃を受けることなんて滅多に無いっての!

「行けっ！ライトニング！！」

「喰らえ！ファイアーボール！！」

「当たれ！エアハンマー！！」

城壁の上では先に集まっていた弓使いと魔術師達が交替で攻撃を繰り返していた。

ふむ……。中級魔術を扱えるのはだいたい二十人程度か……。意外と少ないな。

魔術師は頭の中で魔術式を構築し、魔力を通すことで初めて魔術を行使出来るようになる。

僕は簡単に構築出来たから、魔術師は皆中級魔術くらいは扱えるモノだと思ってたけど……。これが魔王補正というヤツなのかな？とそんなことはどうでもいいや。

僕は魔術を行使する為に意識を集中させる。

「ブラックバウンド！」

僕の眼前にピンポン玉サイズの黒い球体が現われる。

小手調べだ！喰らえ！！

黒い球体は、僕の狙い通りに黒い犬っぽい魔物に命中した。すると犬っぽい魔物は命中した箇所から盛大に血と臓物を吹き出しながら死滅した。

……凄い威力だな、あれ。胴体が吹き飛んでるよ。これはイケるかも知れないな。……。よし！数を増やそう！

「ブラックバウンド!!」

先程よりも、多量の魔力を注ぎ込み魔術を発動させる。

およそ三十程の黒い球体が現われ、一気に数十の魔物が弾け飛んだ。

「な、なんだ？今の……」

「すげー」

「オレも負けちゃいられん！」

どうやら周りの人達の士気を上げるのにも役にたっただけらしい。

……… どんどん逝ってみよう!!

side 尚輝

門の外に出ると、上の連中の遠距離攻撃が始まっていた。

「この後、上からの攻撃が止みますので、タイミングを合わせて接敵します！準備はいいですか？……… 一、二、三、突撃い！」

ギルド職員の言った通り、弓と魔術の雨が止み、それと同時に突っ込んだ。

「ウオオオオ!!」

緑色の肉体を持つ小人…………ゴブリンを正面から斬り捨てる。

「ホーリーアロー!」

更になら飛び掛かってきたウルフに光の矢をブチ当てる。
くそ! 敵が多過ぎる!!

「ホーリーランス!」

手から光の槍を生み出し、硬い鱗で覆われたリザードマンに突き刺す。リザードマンは奇声を上げながら倒れる。

オレの周りには魔物の臍物や赤黒い血が飛び散っている。

キモチわりい…………。

肉を断つあの感触…………、飛び散る血飛沫、そして辺りに漂う血のニオイ…………。正直言って、気が狂いそうだ。魔物…………否、生物を殺すことに慣れていなかったら吐いていたかもな。こりや…………。

「ハアアアッ!!」

剣を横に払い魔物を二体同時に切り裂く。

そして、剣に刻まれたルーンに魔力を通し、刻印を起動させる。

この剣を潤に貸して貰った時にどんな効果かは聞いてある。この刻印の効果は……………“加速”だ。

「ブースト!」

瞬間、あらゆる音が消え去った。

s i d e
潤

「お、おい！なんだありや！？」

その叫び声が聞こえたのは、僕が丁度百体目の魔物を始末した時だった。

「あいつ……、とんでもねえ速さだ！」

隣りの弓兵の指差す方向を見ると、白いロングコートの男が、音速に迫る程の速さで魔物を蹴散らしていた。

あれは……、荻島か。なるほど、アレを発動したのか。

荻島に貸したあの両手剣には、持ち主のスピードを倍にする“加速”の刻印が刻まれている。しかし、それだけではあれ程のスピードは出ない。なら、どうかしたのかというと……もう一つの刻印を起動させたのだ。

あの両手剣には珍しいことに二つの刻印が刻まれている。だが、魔力を通すだけでは起動しない。起動させるには『ブースト』というキーワードが必要だ。

この刻印は“倍加”という能力で、更に速度を倍にする。しかも一定時間ごとにだ。故に、あの剣の銘は『アクセル』……………。

圧倒的な加速により、究極的な速度を手に入れた、最速の剣……………。ただ、速さのみを追求した末に生み出された“魔剣”とも呼ばれて

いる存在だ。

それは、持ち主の肉体があのだ圧倒的な加速についてこれないからだ。アレの加速は止まる所を知らない。持ち主にさえ制御出来ない速度に、肉体はついてこれず……、四散する。それがあの剣が魔剣と言われる理由だ。

え？そんな危険な剣を渡して大丈夫なのか、だって？…… 大丈夫だろ、うん。もし大丈夫じゃなかったら、線香くらいは用意するし。さて……、そろそろ僕も行こうか。ここで援護するのも飽きたし……。

僕は魔力を全身に纏い、城壁から飛び降りる。

「お、おい！何してる！って飛び下りたー！？」

上から何やら叫び声が聞こえてきたが、気の所為だろう。

魔力で落下の衝撃を緩和させる。

さあ、始めようか。殺戮を！！

side 尚輝

グッ！すげースピードだ！！

魔物でうめ尽くされている平原を駆け抜ける。

これが噂の殺人的な加速ってヤツか？

そんなことを考えながら、擦れ違いざまに一撃をお見舞いする。

魔物はあれからどんどん増えているみたいだ。斬っても斬っても魔

物の数が減らない。

「グオオオオオ!!」

いきなり目の前に巨大な熊……グリズリーが現われた。腕を振り上げ、オレに向かって振り落としてきた。だが、今のオレには掠りもしない。

「グガガアアアア……」

雄叫びを上げ、胴体から血を流しながら倒れた。オレが通り抜けた時に剣で切り付けたからだ。

あいつには突然腹を切れたとしか感じられなかったろうがな。

それにしても……、この剣マジですげーな！超はえー……。ちょっと体がギシギシいつてっけどな！……マジ痛てーわこれ。明日は筋肉痛かな？こりや……。

頭ではそんなくだらないことを考えていても体は勝手に動くようだ。魔物を三体纏めて切り払う。

この調子なら思ったよりも早く片付くかも知れねえーな。

そっぴゃあ……、潤は何してんだろっ？まあ潤なら大丈夫だとは思っけど……やっぱ心配だなあ。

side
潤

さて……、さっきはあんなちょっと恥ずかしいセリフを言ってみた

けど……、やっぱり面倒だな。

二メートルはあるだろう大剣を振るう。すると、五体程の魔物が一斉に宙を舞い、ズタズタに引き千切れ、血飛沫がシャワーのように降り注ぐ。

まるで血の雨だな。

更に一閃、また魔物が吹き飛んだ。

「グラヴィトン」

魔術を発動させると、十メートル程離れた位置にいた十体の魔物が重力波に押し潰され、まるで車に轢かれた蛙のようにペチャンコになった。

うーん、我ながらグロい殺し方をしたもんだ。……キモチ悪い。

少し吐き気を催しながらも、半ば機械的に魔物を駆逐していく。

味方に当てないよう、気をつかって魔物を薙払う。

ふう……。門の周りに群がっていたのはあらかた片付いたか。それでも後千は残っているので気は抜けない。何故なら……

「ギチギチギチイ!!!」

此処が、戦場だからだ！

後ろから不意打気味に襲ってきた巨大なカマキリの一撃を大剣で受け止める。

こいつは……、マンティスか！

もう片方の鎌が僕を襲う。

「シャドウバインド！」

術式を一瞬で構築し、行使する。すると、マンティスの影から黒い蛇のようなモノが飛び出し、マンティスの体を拘束する。

「ギイイイイ!？」

己の影から現われた黒いナニかに驚いているようだ。表情は読めないが、雰囲気と叫び声で何となく分かる。

「五月蠅いんだよ。耳障りだ。もう黙れよ」

自らの影に拘束され、身動き出来ないマンティスに刻印を起動させ、本来の三倍の重さになった大剣を振り降ろし、マンティスを真つ二つにした。…………縦に。

うん、縦に切るのもグロいね。まあ縦に切るというよりも“割った”とか“押し潰した”と言った方が適性かもしれないが…………。

「ッ!？…………ガ!」

後ろからの攻撃をモロに喰らい、倒れそうになったが、なんとか踏止まることができた。

背後に振り返ると、そこにはウルフがいた。さっきの衝撃はこいつが体当たりしてきた所為だろう。

イッタ…………。今の絶対痔できてるよ。しかし、さっきちょっとカッコつけて言った台詞が意味なくなってしまった。油断しなけりや完璧だったのに…………。まあこの数相手に無傷は無理だと思ってたから覚悟はしてたけどな。

取り敢えず、僕にダメージを与えた犬ッコロに制裁を加えることにしよう。大丈夫!痛くないからね♪

side
レン

「……………は！」

「どうしたの？レンさん」

今私はジュン様との話合いの結果、妥協案として負傷者の治療を力
オル様と共に行っていたのですが……………、何やら妙な胸騒ぎがします。

「いえ……………、ジュン様からの電波を受信しただけです。ご心配に
は及びません」

「それは充分心配するべきことだと思うよ？頭の」

「意外と毒舌なのですね。驚きです」

「荻島君たちと同じクラスだったんだよ？これくらいむしろ当然だ
よ」

……………どのような方々なのですか？ジュン様のクラスメイトは……………
…。

恐ろしくて想像できない。

「それで、どんな電波を受信したのかな？」

ここでその話題に戻りますか……………。侮れませんか。

「何と言いますか……………、ジュン様がこれから『今日の惨殺わんコ』のコーナーを始めたような気がしたんです……………」

「うーん、凄く具体的でとても放送できそうにない内容の電波だね……………」

その通りですね。ジュン様が楽しそうに犬を解体している姿が目には浮かびます。…………… ああ！犬が挽き肉になってしまいました。もうハンバーグを食べられないかもしれません。

「レ、レンさん！？大丈夫？顔が考えられないくらい真っ青だよ！？想像したの？想像しちゃったんだね！？そうなんだね！？」

ああ……………、カオル様。エチケット袋を……………、エチケット袋を用意して……………く、ださ……………い……………おええ。

第十二話 魔人登場

side シーナ

ハア、ハア、ハア……………。

荒い息を振り乱しながらも、わたしは走る。

急がないと間に合わないかもしれない。ジュンさんたちが負けるとは思わない。ただ……、それでも心配なものは心配なのだ。

例えばどんなに強くても、どんなに魔力があつたとしても、ケガはするし、負けもする。死んでしまうことだってあるかもしれない……。…。そう思うと、いてもたってもいられない。

急げ！急げ！と心が叫ぶ。

「きゃっ!?!」

痛い……………。足がもつれて転んでしまった。ヒザを少し擦りむいてしまったが、こんなケガは魔物の討伐依頼で慣れっこだ。むしろ変に捻って歩けなくならなかっただけマシだろう。

「オイオイ、大丈夫か？シーナ」

声が聞こえた。顔を上げると、そこには見慣れた三人の顔があつた。

「シ、シーナ!?!大丈夫？痛くない？」

「大丈夫だよ、そんなに心配しないで、ターニャ」

彼女はターニャ。緑色の髪が印象的な優しい子だ。

……時々何も無い場所で転んだりするけど……。

「シーナって意外とドジなトコあるよね。ボクより強いのに」

この子はレイヴン。灰色の髪をした魔術師だ。

いつも無表情で、何を考えているのかよくわからない。

「ほれ、お前のグローブと防具、持って来てやったぞ！感謝しろよな！」

このエラそうにわたしの武具を投げてよこしたのはいつもイタズラばかりしてるコマ。

燃えるような紅い髪が特徴だ。というかそれ以外にコレといった特徴がない。

「どうしてここにいるの？」

「あのね、コマが……」

「余計なこと言うな！このボケボケ女！！」

「コマ！ターニヤに乱暴しないで！！」

「ボケボケ女のところは否定しないんだね」

「……………ごめん。そこは否定できない……………。正にピッタリって思っちやったし…………。」

「と、とにかく！シーナと合流できたんだからいいだろ！！細かい

ことは気にすんな！」

「誤魔化したね」

「うつせー!!」

どうしたんだろう？ コーマが顔を真っ赤にして喚いてる。まあどうでもいいか。コーマだし。

「そして相変わらずシーナは鈍いと……………」

「むむ！ どういう意味！？」

「何でもない」

わたしが問い詰めてもレイヴン君は相変わらぬ無表情で、なんの反応もない。こういうのを『柳に風』って言うんだっけ？

「シーナ、足、治しといたよ」

「ありがとう。ターニャ」

ケガをしたヒザの辺りを見ると、擦りむいたところは元通りになっていた。

ターニャはちょっとドジなところもあるけど、治癒魔術の腕は一級品だ。ただ……、得意になった理由が自分が転んでできたキズを治すためなのだからイマイチ締まらない。それがターニャらしいと言えばターニャらしいんだけど。

「それじゃ、みんな！ 行くよー！」

「「応！！！」」

「ってオレを忘れんじゃねえ！！」

待って下さいね、ジュンさん。今いきます。

s i d e 潤

「ブラックバウンド！」

数十の黒い球体が魔物を貫く。その度に魔物の断末魔が聞こえてくる。正直言つて耳障りではない。

「グガガアアアア！！」

「ッ！くそ！」

後ろから近付いてきたグリズリーとかいうクマ野郎の攻撃を大剣で受け止める。

「鬱陶しいんだよ！！熊鍋にすんぞ！！！！」

闇のゲートからナイフを取り出し、クマの右腕を切り落とす。

「失せろ」

大剣を闇のゲートに仕舞い、ナイフで首を切り裂く。

「グオオオオオ………」

クマ吉は首から噴水の様に血を吹き出しながら崩れ落ちた。

「グラヴィトンハンマー！」

重力の塊が辺りの魔物共蹴散らしていく。

クソ！いい加減飽きてきたぞ！まだ終わらないのか！！

周りにはグチャグチャに成り過ぎて、元がいたい何だったのかすらわからない魔物と冒険者の死骸で溢れている。

どうやら、此所に居た魔物はあらかた片付いたらしい。ドツと疲れた。帰って寝たい。レンに膝枕でもしてもらおうか？

「ジュン君。大丈夫か？」

「あ、はい。大丈夫です」

僕の後ろにはダンディなスマイルを浮かべているイケメンの冒険者がいた。

「ラガルトさんこそ、大丈夫ですか？」

「ははは！私なら平気だ」

この人はあの忌々しい犬っころを惨さ………もとい始末した後、次

の獲物を求めてうろつろしている時に知り合った親切なオジさまだ。因みにランクはAというベテランさんだ。

「それはそうとジュン君、何故大剣を仕舞ったんだ？」

「なんか飽きちゃって」

「その理由はどうかと思うが……」

僕もそう思う。でも飽きちゃったんだからしょうがない。

「まあいいじゃないですか。些細なことです。そんなことより……、魔物は後何体居るかわかりますか？」

「そんなことで済ませてしまえる様な問題ではないと思うんだが……、まあいい。魔物の数だな？今調べる」

ラガルトさんは風の魔術の使い手で、風を使った魔物感知が出来るらしい。便利な魔術だ。羨ましい……。

「半径三キロに反応多数。数、五百」

ふむ……。ここは大分減ったと喜ぶべきか、それともまだ五百もいるのかと嘆くべきか……。

「……ッ！！？なんだ！？この反応は！？」

「どうしました！？」

ラガルトさんの反応がおかしい……。こんなに怖い顔をしている

ラガルトさんは初めて見る。…………さつき会ったばかりだけだな。

「この反応は…………魔人だ…………」

s i d e
レ ン

「ッ！？ イツツ……………！！ オイ！ もっと丁寧にできねえのか！
」

「我慢して下さい。 いい大人が情けないですよ」

ふう。 さつきから文句の多い負傷者ばかりで気が滅入ってしまいそうです。 まあ、これだけ叫ぶ元気があればすぐに戦線に復帰出来るでしょう。

「レンさん。 もうすぐ包帯無くなりそうだから、貰ってきてくれる？」

「わかりました」

それにしても、こつも負傷者が多いとは予想外でした。
しかし、死者はそれ程出ていないそうですし、引き際を弁えている
ということでしょうか？

「包帯の補充にきました」

「はい。ちょっと待っててください」

ここはギルド職員が設置した簡易テントの一つ、私とカオル様は此所で負傷者の治療をしているのです。

私は医療の心得がありますし、カオル様は治癒魔術を使えるのでギルド職員の方々に手伝いを申し出たところ、喜びに咽び泣いていました。……………今ならその気持ちご理解出来ます。まさかここまで忙しいとは思いませんでした。

「お待たせしました！」

職員の方が新しい包帯を持って……………ピラミッド？

私の眼前には職員の方が新しい包帯を両手で抱えています。それはいいんです。ええ、私が頼んだのですから。問題なのはその量。

まるで山の様に包帯を積み重ねており、それを抱え込んでいる職員の顔が見えない。私にこれを持てと？……………無理です！いやいや！『さあどうぞ』って不可能ですから！限度つてものを考えて下さい！！

仕方がないのでこの山の三分の一を運ぶことにしましょう。今は一秒も無駄には出来ませんから……………。

「遅れてすみません」

「まだ包帯は少しだけ余ってるから大丈夫だよ。それよりそつちの人の治療をお願い」

「了解しました」

カオル様は私がない間一人で治療を続けていた所為か、かなり疲労しているようです。私と違って治癒魔術も使用しているので当然と言えば当然なのですが……。

いえ……、こんなこと考えていても意味はありません。今は治療に専念しなければ！

……それにしても外が騒がしいですね。いや、騒がしいのは前からですが、今は……何かに怯えているような……そんな感じがします。いったい何が起きているのでしょうか？

side シーナ

「魔人が出たぞー！ー！！」

「嘘だろ！？か、勝てるワケねえ……………」

「こんなところで死んで堪るか！ゼツテー生き残ってやる！」

「俺……、今だから言っけどさ……………来週、あのコと結婚するんだ」

「ば！？おま、それ、死亡フラグ！」

カオスだ……。限りなくカオスだ。特に最後の方の人はフラグたってるし…………。

戦いの準備を整えたわたしたちは、北門を出てすぐの所まで来てた

んだけど……、これは予想外。まさか魔人がいるなんて思わなかった。

「なあシーナ」

「どうしたの？ コーマ、そんな変な顔して………下痢？」

「チゲーよ！！なんで下痢？そこはせめて『お腹痛いの？』ぐらいにしとけよ！後、変な顔って言うなー！！！！」

「はいはい。叫ばないでよ。ウルサイんだから、もう……」

まったく、冗談が通じないヤツ！

「何時まで癪癪起こしてるつもりなの？言いたいことがあるなら早く言ったら？」

流石はレイヴン君。冷静に言ってるのに逆らえないオーラを出してる。

「わーってるよ！たく、いちいちうるせっての………」

「それで、何が言いたいの？」

話をするように促すと、若干言いくそうにしてたけど、恥ずかしそうに口を開いた。

「ま、魔人って………なんだっけ？」

「……はあ！？」「」

「だ、だから！魔人って何なんだよ！！」

呆れた。まさか、魔人を知らないなんて……、バカとしか言いようがない。

「コーマ……。いくら君が勉強嫌いだからって、魔人を知らないなんて有り得ないよ」

普段無表情なレイヴン君がここまで感情を顔に出すなんて初めてのことだと思う。……その感情が“呆れ”なのはかなり微妙なところではあるけど……。

「う、ウッセーよ！！ち、ちょっとド忘れしただけだ！！」

「コーマ……。帰ったら、勉強しよっか」

あ、ターニヤがトドメさした。笑顔で残酷なことを言うよね。コーマにとって勉強をするということは死と同義だから。

「ふんっ！どうせオレは魔人のこともロクに知らないオオバカヤロ―だよ……」

あ、拗ねた。全然可愛くない。ジュンさんならお持ち帰り確定かどうか……。

「はあ……。じゃあオオバカヤロ―のコーマに説明するけど……、魔人というのは闇の帝王に造り出された魔道生命体で、又の名を『ホムンクルス』という。魔人は最低でも討伐ランクAの戦闘力を誇り、強大な魔力と強靱な肉体を持つバケモノさ。更に見た目は人間

と変わらないから魔力を隠されたら魔人を認知出来なくなる。その代わり、その間は魔人としての力は失うけどね」

解りやすい説明ありがとうレイヴン君。これでバカ（コーマ）も理解出来るよ。

「……………と、とにかく魔人ってのは凄く強いってことはわかったぜ！」

……………コーマはわたしたちの想像を遥かに上回るバカだということがわかった。…………バカにつける薬ってホントに無いのかな？もしあったらこのバカに飲ませてやりたい。それと一緒にわたしの拳も喰らわしてやりたい。

「ところでシーナ」

「どうしたの？ターニャ」

どうしたんだろう？ターニャの顔が真っ青だ。いつもニコニコしてるターニャにどこに行ってしまったんだろう……。面白いくらい顔が引きつってる。

「う、う、うつし、うつし……………」

「牛？」

「シーナ！後ろだ！！」

珍しく焦っているレイヴン君を見て、急いで後ろを振り返ると、そこには……………

「ふむ……。漸く気付いたか。私には存在感というモノが欠けているのかと心配してしまったよ」

くつくつくと人を馬鹿にしたような笑みを浮かべる男……。否、魔人がそこにいた。

第十三話 二つの脅威！？

「ラガルトさん、魔人の現在地は？」

「北門を出てすぐの所だ」

ふん。ここから全力疾走すれば五分で着けるな。

「…………行くのか？」

「当然」

そもそも僕は闇の帝王とやら倒す為にこの世界に召喚されたんだから、魔人くらい倒さないかね。

「では、私は向こうの手助けに行くよ。Sランクの魔物が出たみたいだからね」

Sランク？どんな魔物が気になるなあ……。まあどうでもいいけど。

「じゃあ、僕はこれで」

「武運を祈っているよ」

ラガルトさんは最後までダンディな人だった。でも、…………魔人よりもSランクの魔物を倒しに行くって聞くと、魔人のことが恐いって言ってるみたいに聞こえてくるから不思議だね。

「ウオオオオ!!」

魔物が血を噴き出して倒れる音を聞きながら、周囲を見渡す。

……ふ……。これでここいらにいる魔物は全部倒したみたいだな。発動させてある刻印を解除しとくか……。流石にキツイ。う……身体中がバキバキいつてる。てか、絶対人体から出ちゃいけない音だよな。これ……。

「よお。お疲れ！スゲーなお前さん、あれだけの数をほとんど一人で倒しちまうとはな！」

「アンタ誰？」

オレに話しかけてきたのはなんともうさん臭い感じのするオッサンだった。橋の下で生活してそうだ。もちろんダンボールハウスで。

「俺はライナス。しがない傭兵さ。因みにギルドにも所属してる。ランクはAだ」

「へー……。オッサンは意外と強えーんだな！」

「誰がオッサンだ！俺はまだ二十代だ!!」

？オレなりに褒めたハズなのになんで怒ってんだ？このオッサン。

「で、オッサンはオレに何か用でもあんのか？」

「だ、だからオッサンって言うなー！どうせならお兄さんと呼べー！！」

また叫び出した。大丈夫なのか？このオッサン……。

「で、ライナスだっけ？もつかいきくけど、なんかようか？」

あ、ヤベー……。頭の中じや漢字に変換できるのに、しゃべろうとしたら全部ひらがなになっちまった。疲れてるのか？オレ……。

「呼び捨てかよ……。オッサンよかマシだけだよ……。と、俺が言いたいのはだな……。っ！？」

？どうしたんだ？いきなり変な顔して……。便秘か？

「オイオイオイ！マジかよ！？何でコイツがこんな所にいんだよ！？そもそも生息地ちげーだろ！？いや、それよりも、何でコイツがここまで近付いてんのに気付かなかったんだよ俺！？」

流れるような連続独りツツコミだな。芸人になれんじゃねえーのかこいつ。

それにしても、なに焦ってたんだ？ライナスのヤツ……。なんかオレの後ろを見て驚いてるみたいだな。

……。なんじゃこりゃ！？

「なあ、ライナス。ナニコレ？オレの目には巨大な岩しか見えねんだけど……。」

「少年、現実を見る。俺たちの目の前にいるコイツは巨大な岩でもましてやそこらにいる雑魚でもない」

ライナスは大きく息を吸って、言った。

「討伐ランクSのバケモノだ」

……………うそん。

side シーナ

「ふんっ！」

ドン！という鈍い音が響き、また一人の冒険者が死んでしまった。たった一人の魔人相手にここにいた大半の冒険者は殺された。逃げようとした者は魔術で消し飛び、接近戦を挑んだ冒険者たちは魔人の驚異的な身体能力により繰り出される拳を受け、踏みつぶされたカエルのような無惨な姿になってしまった。

遠距離からの上級魔術も魔人の魔力障壁に防がれてしまう……。戦闘が始まってたった五分でわたしたちは壊滅状態……。対する魔人はかすり傷を負った程度……。

勝てる気がしない。魔人が強いのは知っていたけれど、こんなに一方的にやられてしまうとは思わなかった。

「おい、シーナ。まだやれるな？」

「当たり前でしょ」

それでも……、わたしたちは諦めない。諦めたくない！

「シーナ、コーマ。治癒終わったよ」

「ありがとう、ターニヤ。レイヴン君、デカいのをアイツにぶつけちゃって!!」

「まあ、ここに居る冒険者たちは重傷でもう戦えないだろうからね。戦える人間がボクたちしか居ない以上、全力でいかせてもらおうよ」

いつもつまらなそうに中級魔術を放っていたレイヴン君も、珍しくヤル気満々だ。

上級魔術を使わないと倒せないような強い敵と戦うことなんて滅多にないから、仕方ないけど……。

「それじゃ、レイヴン君以外はいつも通りに戦うよ！」

「「「応!!!!」」」

「3、2、1、ゴー!!!!」

わたしの合図でみんなは一斉に動き出した。

レイヴン君は最高の一撃をおみまいするために全魔力を集中し、ターニヤはコーマに肉体強化の魔術をかけ、中級魔術である『ウォー・ターアロー』を発動し、魔人の注意をそらす。コーマは魔人の下へ

一直線に駆け出した。

わたしは手足を獣化させる。

獣人は獣の姿になることによって、一時的に驚異的な身体能力を得ることができる。その代わり、魔力と体力をかなり消費する。だから、そう何度も使用することができないのだ。

それを解消するために編み出されたのが部分獣化だ。部分獣化は文字通り、手や足だけを獣化させることで体力と魔力の消費を抑えることができる。

「ウオオオオ!!」

コマが威力重視で選んだ両手剣で切りかかる。ターニヤの魔術で強化された今のコマなら、岩を両断するくらいは簡単にできる。

「ほう。未だ若いというのに、なかなかやるな」

魔人は感心したように呟き、コマの一撃を受け止めた。……素手で。

「な!!」

「だが、剣を抜くまでもないな」

「うふ……」

魔人が無造作に繰り出した蹴りを受けて吹っ飛んだ。今までのと比べると明らかに手加減されている。

「げほっごほっ……。クソ！バカにしゃがって」

「ふむ……。気絶させるつもりだったのだが…、力加減を間違えたか」

コイツ、コーマをバカにして嗤ってる……。

「どうして手加減した」

「決まっているだろう？」

魔人は楽しそうに嗤いながら言った。

「その少年が目を覚ました時、君達が死んでいる様を見せてやろうと思ってな。そうすれば、少年の絶望に染まった顔が見れるじゃないか」

side
尚輝

「G A A A A A ! ! ! !」

「どわあ!？」

ポケ。ンのはか。こう。んのような攻撃を必死に避ける。
マジでヤバかった。当たったら死ぬかもしれん……。

「おいオッサン！なんなんだよアレは！？」

「奴はロックドラゴンだ！中位のドラゴンで強力な『ブレス』で攻撃してくる！後、オッサンって言うな！！！」

ドラゴン!?ドラゴンってあのドラゴンかよ!?

ドラゴンってゲームとかでもよく出てくる最強クラスの敵じゃねえか！？

「ロックドラゴンの攻撃はブレスによる遠距離攻撃だけじゃない！体内で生成した鉄の塊を吐き出して攻撃してくるものがある！」

「げえ！ブレスだけでも手に負えないっていうのにまだあんのかよ！でも鉄の塊をとばしてくるだけならブレスよかマシだろう。」

「G
A
A
A
A
A
!!!」

ロックドラゴンが咆哮をあげる。

またプレスか！？アレは防げねえ。防御しても数秒しか保たねえ……。避けるしかない、か……。

「て、なんじゃこりゃ!？」

飛んできたのはプレスじゃなくて鉄の塊だった。多分、1メートルはあるな。

「こんくらいなら防げ……って無理じゃボケエ!!」

慌てて回避する。あんなでけーのにプレスより速えーじゃねえか！？避けて良かった…。いやマジで。

「因みに、鉄の塊が飛んでくるスピードはプレスより速い！気をつける！」

「いや、言つの遅えーよ！！！」

確かにアレを避けるのは大変だ。銃弾と同じくらい速い！いや見たことないけどよ……。

「プレスは威力があるが、予備動作があるから避け易い。鉄は連射出来るし、スピードもあるからこっちの方が厄介だ」

「それはオレが今、一番よく解ってることだって、の！！」

鉄が連続で飛んでくる。ヤバい。避けキレねえ……。防げることは防げる。けど……。二三発受けたら剣が折れる。あとオレの心も……。今オレ上手いこと言ったかもしれん！あとで潤と北河にも聞いてもらおう。ってんなこと考えてる場合じゃねえ！！

「殺られて、堪るかー！！！！！」

頭の中で術式を構築し、展開させる。そして、あの鉄を防げるように魔力をぶち込む！

「ライトシールド！！！」

金色に光る魔力障壁がオレの目の前に現われる。まともに受けるのはヤバい。だったら……

「まともに受けなきゃいんだろ！！！」

盾を斜めに、無理に受けようとせずに、力を受け流すようにして鉄をやり過ごす。

「よし！全弾防ぎきってやったぜ！！」

「バカ！！油断するな！！！！」

ライナスの焦ったような声が聞こえた瞬間……、オレはナニカに吹き飛ばされた。

side
シーナ

……アイツは今何て言った？わたしたちをクロス？コマの絶望した顔を見てタノシムために？……ふざけるな！！許せない許せない許せない許せない！！

思考が白熱する。怒りで目の前が真っ赤に染まる。

「シーナ、冷静に。怒りで我を忘れたら、勝てる勝負も勝てなくなる」

「わかってるよ！」

そんなこと、言われなくてもわかってる。それでも、この激情はお

さまらない。

「シーナ……、怒ってるのはシーナだけじゃない。ボクも向こうでコーマの援護をしているターニャもだ。そして、一番怒ってるのも、一番惨めな思いをしているのもコーマなんだ。ボクが言いたいこと……、わかる?」

「……………わかる」

「なら、これからどうすればいいかもわかるね?」

「うん……………」

聞き分けのない子どもを諭すような言い方だけど、レイヴン君が言うど、素直に言うことを聞く気になるから不思議だ…。

「それじゃ、そろそろコーマのところに行ってくれる?今は魔人が遊んでるからなんとか保ってるけどこれ以上は流石にキツイ」

そっか……………。わたしがここで怒りに我を忘れて完全に獣化しようとしてる間、ずっとコーマとターニャの二人で戦ってたんだ。

「シーナ、もう冷静に戦えるね?」

「うん、もう大丈夫。頭もスッキリしてるし」

獣化もわたしがギリギリ制御出来る四割くらいで止まってる。わたしはまだ獣人としての力を完全には扱えない……。今のわたしには、良くて五割程度しか制御できない。

「それじゃ、行ってくる」

今のわたしのスピードは、獣化する前のわたしの比じゃない。魔人との距離なんて、あつてないようなものだ。後はどのタイミングで奇襲をかけるかだ。援護をしているターニヤの横に並んで様子をうかがう。

魔人はコーマの攻撃を右腕だけで防ぎ、時折飛んでくるターニヤの魔術には、同じくらいの威力の魔術をぶつけることで相殺している。ヤツなら避けることも魔力障壁を展開し続けることも可能であるにもかかわらずだ。完全に遊ばれている！でも、だからこそ付け入る隙がある。

わたしは魔人の背後に回り込み、体重の乗った拳を繰り出す。

「ム！？」

魔人は驚いたような声を漏らす、攻撃が効いた様子はない。

「流石は猫の獣人だな。予想以上の速さだ。……だが、少々拳が軽すぎるぞ？」

「くっ！」

突然の衝撃がわたしを襲う。コーマのように吹き飛びはしなかったが、わたしの体勢を崩すには充分だった。

「まずは、君から死んでもらうことにしよう」

魔人から凄まじい魔力を感じる。恐らく、魔術を発動させるつもりなんだと思う。

「やらせるか!!」

コマが連続で切りかかるが、魔人は意に介する様子もなく、淡々と防ぐのみ。

「アイスコフィン!」

魔人の頭上に巨大な氷柱が現われた。

「いつけ!!」

「アイスシールド」

魔人は氷属性の魔力障壁を展開。ターニヤの魔術は魔人の障壁を貫くことはなかった……。
でも、わたしが体勢を整えるには充分すぎる程の時間が経っていた。
わたしの右腕だけに大量の魔力を集中させる。

「ハアアア!!」

渾身の一撃を放つ!その拳は、ガラ空きだった魔人の腹部にめり込んだ。

「グハッ!」

魔人は苦悶の声をあげながら二三歩程よろけるが、それだけだった。

「まさか……、一撃いれられるとは思わなかったぞ!だが、今ので仕留められなかったのを悔いるがいい!」

わたしだって、あれぐらいで倒せるとは思ってない。この魔人を倒すにはあの十倍は必要だ。

そんな攻撃、今のわたしにはできない……。それに、わたしの仕事は時間を稼ぐことだから、倒す必要はない。

「デジタルウェイブ!!」

ターニャが覚えてる唯一の上級魔術が発動した。

巨大な波が何もない平原に現われる。

「広範囲殲滅魔術だ?!? バカな?!? 味方を巻き添えにするつもりか!?!」

今、この状態なら魔人も上級魔術で相殺させることはできないし、避けるにしても、距離も時間も足りない……。それはわたしとコマにも言えることだけだ。

「くっ! 仕方ない……。アイスシールド! 三重展開!!」

魔人を覆うように氷の障壁が三枚展開される。ちゃんと水が入り込まないようにドーム状にしてある。

「流石魔人! ぬかりないね」

「そうだよな!。こんだけ頑丈そうなのが三枚ありや、安心だよな!」

「って何で貴様らが私の障壁の中にいる!?!」

そんなの決まってるじゃない。なんでそんな決まりきったこと聞く

んだろう？

「「ここが一番安全だから？」」

「私に聞くな！！というか貴様らは仲間の攻撃が成功することを信じてないのか！？」

「いや、この程度の威力じゃムリでしょ」

「うんうん。魔力もそんなに込めてないみたいだし」

「そんなことよりよそ見していいのかよ。障壁にヒビ入ってきたぞ」

「集中しないと破られちゃうよー」

「き、キ・サ・マ・ら~~~~！ええい、クソ！！」

これでよし！魔人は障壁に集中しないといけないから、わたしたちを攻撃するヒマはない。まあ、わたしたちも手を出せば、魔人と一緒にドボンしちゃうから何もできないんだけどね。

「この水が引いたらその息の根を止めてくれるわ！！」

「オイオイ、オレは殺さねえんじゃないのか？」

「気が変わった！貴様らは塵も遺さず消し去ってやる！！」

コワイコワイ。血管浮いてるし、沸点の低い魔人だなあ。さっきキレかけてたわたしに言えることじゃないけど。

ん？水が引いてきた。障壁が消えるのと同時に魔人から離れないと

ヤバいかな？

「コーマ」

「ああ、わかってるよ」

それならよし！さて、そろそろだね。

水がひき、魔人が障壁を消した。

それを確認すると同時にコーマと一緒にターニヤの下へ一直線。

「バカめ！私に背中を向けるとはな！死ねい！！」

「死ぬのは君の方だよ」

「なに！？」

魔人の背後から現われたのは、びしょ濡れのレイヴン君だった。

side レイヴン

ターニヤの考えには驚かされる。

僕が幾ら魔力を最大限に高めようと、ここからじゃ魔人を倒せる程の威力は期待出来ない。魔人を倒すには、至近距離で魔術を発動させるしかないだろう。でも、相手は魔人だ。そう上手くはいかない。

魔人に気付かれないように近付くのはボクには無理だし、よしんば近付けたとしても、次の瞬間にはボクの頭は魔人の攻撃で吹き飛んでいることだろう。

魔人を倒すには、ボクが魔人に気付かれないように近付き、尚且、魔人の意識が別に向いている必要がある。

それを可能にしたのが、ターニヤの『ダイタルウェイブ』だ。ボクは氷でできた板に乗り、波乗りの要領で魔人に近付くことに成功したのだ。

シーナとコーマは何も考えてなかったんだろうけど、魔人を挑発して注意を惹きつけてくれた。

これだけ条件が揃っているんだ。後はボクの役割を果たすだけ。

「デッドエンド」

杖から放たれたのは、闇。触れる全ての生命を終わらせる最強の……否！最凶の闇！アレを喰らえば、魔人といえども致命傷は避けられない。

「ニンゲン風情があ、魔人をナメルナア！！！」

魔人が障壁を展開させる。その数は……五枚。あの一瞬で障壁を五枚も同時展開させるその術式の構築の速さは驚嘆に値する。だが、ボクの闇はその程度では止まらない。

「な！？私の障壁が……破られるだ！？」

魔人の障壁には所々ヒビが入っていて、そのヒビに闇が侵入する。そして、次の瞬間、パリンというあっけない音が鳴り響き、氷で出来た障壁が砕け散る。また一枚、また一枚と障壁が破壊され、魔人を守る最後の障壁もあっけなく砕け散った。

「バ、バカなああアア!!?」

魔人の姿は、闇に飲み込まれた。

第十四話 一難去つてまた一難

side 尚輝

「ごふつ。げぼげぼ……、な、なんなんだ、いったい……」

全身が激しく痛む。特に腹の辺りが痛てえ……。吹っ飛ばされた時に頭を打ったみたいだ。なんか視界が回る。

「大丈夫か!？」

この声は……、ライナスか。てか、オレどうなったんだ? なんかいきなりぶっ飛ばされたんだが……。

「何があったかわからねえ、て顔してんな。……お前はロックドラゴンの尻尾でぶん殴られたんだ」

なるほど。尻尾か……。アイアンテール? 違うか。

「くっ…、なんか吐きそう……」

「おい、急に立ち上がらない方が……」

「ここで寝てたら潰されんだろうが」

ぐう……。……やっとなんかハッキリしてきた。うし! もうひとぶんばりといきますか!

「……っ！ヤバい避ける！！」

ライナスの言う通りに今すぐにここから離れる。
そして次の瞬間、今までオレが寝ていたところにプレスが直撃した。
はあー、びっくりした……。ヤバかったな、地面抉れてるし……。しかもちよつと溶けてるし。

オレもいつあなるかは時間の問題ってことか……。
なら、やられる前にヤル！

「ホーリーアロー！」

オレの目の前に現われた光の矢はおよそ三十……。
これでどうだ！

「無駄だ！奴にそんな威力の魔術は通用しない！」

光の矢がロックドラゴンに全弾命中する。

だが、ライナスの言った通り、ヤツに効いた様子はない。

「奴の一番厄介なところはあの防御力！武器も魔術も半端な威力じゃ奴の硬い表皮に傷一つつけることが出来ないんだ！」

くそっ！そういうことは先に言え！！

どうすりゃいい……。アイツに効果的な攻撃はいつたいなんなんだ！？

「お困りのようだね。助っ人は入り用かな？」

なんだ？ライナスよりは年上っぽいけど……。あっちはダンディな感じがするな。

「ラガルト！？何でお前がここに！？」

「おや？ライナスじゃないか！久し振りだな！」

なんだかよくわかんねえけど、知り合いみたいだな。

あのラガルトとかいう人も、結構強そうな感じがするし、イけるかもしれないな……。

よし！行くぞ！！

………そういえばそんな名前のキャラがいたような………どうでもいいか。

s i d e シーナ

「すげー………」

「うん、魔人が吹っ飛んじやった………」

レイヴン君の放った闇属性の高級魔術『デッドエンド』は魔力障壁ごと魔人を吹き飛ばしてしまった。

正直ここまで凄いとは思わなかった。精々腕の一二本消し飛ばす程度だと思ってたのに……。

「ふう………、流石に疲れたね。魔力も殆ど空だ。でも、これで魔

人を倒せるんなら安いものなのかもしれないけど」

「レイヴン君!!」

全身ずぶ濡れのレイヴン君がいつもみたいにつまらなそうな口調で話しかけてきた。

今の一撃で魔力を使い切ったハズなのに、全然疲れているようには見えない。

「レイヴン、魔人はホントに死んだのか？実は生きていてオレたちが帰ろうとした瞬間に後ろからザックリとかはナシだぞ？」

コーマは魔人を倒したことが信じられないようだ。でも、それも仕方ないことだと思う。

あの魔人はたった数分でここにいた大勢の冒険者を全滅させたのだ。わたしたちが生きているのは魔人が手加減したから。もし魔人が最初から全力で戦っていたら、今ごろわたしたちも、他の冒険者のように無惨に殺されていることだろう。

「大丈夫だよ。魔人の肉体は闇に蝕まれ、消滅した。塵も遺さずね。魔人が消えるのを目の前で見たんだ、間違いないよ」

「そうか……。オレたち、ホントに魔人に勝ったんだな……………」

コーマは魔人を倒した実感が湧かなかったのか、何処か信じられないと言った面持ちで呟いた。

わたしも信じられないけど、レイヴン君が言うのなら間違いはないだろう。レイヴン君は事実しか言わない。……………隠し事はするけど。

「みんな~~~~!」

一人だけ離れていたターニヤが大声を上げながら駆け寄ってきた。途中でコケないか心配したけど、なんとかコケることなくここまで走ってくる事が出来たようだ。

ターニヤはよく転ぶから、しかも何も無いところで。

「わたしたちは一旦ギルドの仮設テントで治療を受けるよ。その後、残りの魔物の殲滅ね」

「妥当なとこだね。コーマはさっきの戦闘でダメージが蓄積されてるし、シーナとターニヤはそれなりに疲労してる。……それにボクは魔力ギレで戦えないしね」

レイヴン君の言う通り、今まともに戦えるのはわたしとターニヤくらいだろう。

コーマも無理すれば戦えなくもないが、それほど長くは戦えない。傷は治癒魔術で治せても、体力までは戻ってはこないのだ。

「じゃあ、そろそろ………」

「残念ですが、貴女達を行かせる訳にはいきません」

わたしたち以外、もう誰もいないハズのこの場所で、大きくもないのによく響く声がわたしの台詞を遮った。

ラガルトが参戦してもオレたちは未だにロックドラゴンとかいう竜に有効打を与えることが出来なかった。

オスティアの姫さんの話じゃ、風属性は守りの硬いヤツには効き辛いらしい……。その代わり探查系の魔術なんかは優秀らしいがそんなのオレには関係ない。

一応風以外の属性も使えるらしいが、上級魔術は使えないそうだと。ライナスは魔力は火属性だって話だが、魔術は苦手で未だに中級魔術までしか使えないそうだと。

役に立たねえ……。ラガルトは風の魔術で鉄塊（オレ命名）の軌道を逸すことが出来るが、ライナスは防御も出来ないし、攻撃もヤツには効かない。よくて表面を焦がす程度だ。ハッキリ言つて、罔ぐらいにしか使えねえ。マジで役立たずだな。

「なんか失礼なこと考えただろ！お前！！」

「何でわかるんだ！？」

「図星かよ！？そしてそんなことが分かってしまふ自分が嫌だ！！」

「……………短い間に随分と仲良くなったようだな、二人とも」

「「仲良くねえ！！」」

げっ！ライナスとハモっちまった。キモチワル！！

「ハモるな！！」

「お前が言っな!!」

「…………やはり仲が良いだろう君たち」

くっ…………！ライナスと仲が良いと思われるなんて…………、屈辱だ。

「とにかく、今はコイツを倒すことだけを考えようぜ？」

「そうだな。今の私たちでは勝てない。何か策を講じなければいけない」

悔しいが、二人の言う通りだ。今は余計なことを考えてる場合じゃない。

何か良いアイデア浮かべばいいんだがな…………。

「GYAAAAAAAAA!!」

突然の咆哮。

見ると、ロックドラゴンが向こうの平原から現われた大量の魔物どもを蹴散らしている。

アイツ、味方だろうと見境無しかよ!?…………いや、必ずしも魔物同士が味方というワケじゃないのか…………。

ん?こんな光景をどっかで見たような…………

「ああ!?!」

「ど、どうしたんだ!?!」

「どっかで頭でもぶつけたんじゃないのか?」

突然叫び声を挙げたオレに驚く二人。失礼なことを言ったライナスは後でボコる。
いや、今はそんなことはどうでもいい！今はあの時のことを思い出さねえとな……。

side オスティアの姫

ナオキとカオルが魔王に会いに行つてからというもの、とてつもなく暇で暇でしようがないのお。

何か面白いことでもおきんかのお。例えば城に賊が侵入したりとか。

「姫様、そのような不穏なことをおっしゃるのは止めて下され」

「小言なら後にしろ。それにここにはわらわとマーカスしかおらんじやろうが」

わらわの後ろに立つておる壮年の男は父上の代から仕えておった元騎士のマーカスじゃ。

剣と槍を極めた騎士で、二十六の時には騎士団長として国を守つておったとか。尤も、隠居した今ではわらわのお目付け役じゃが……。

「それにしても暇じゃ……」

「ならば、本を読んでみては如何ですか？教養が深まりますぞ」

「マーカスよ。お主はわらわにどうしても勉強をさせるつもりなのか？今は休憩時間の筈じゃが……」

「休憩のお時間ならとつくの昔に過ぎているのですが？」

むう………？そうじゃったかの。最近退屈過ぎてツマらんことは直ぐに忘れてしまうのじゃ。よって休んだ気がしないからもう一度休憩を………

「姫様。余りワガママが過ぎると後が酷いですよ？」

「それはどういう意味じゃ」

「罰を与える、ということです。例えば……、ナオキ様に光の上級魔術をお見せする為に訓練をしていた兵士ごと破壊した練兵場の修理をするとか………」

「さあて！続きをすることにしよう！確か竜種についての項目からじゃったな！！」

うむ！勉強に励むのも立派な王女としての仕事じゃ。疎かにしてはいかな！

決して片付けをするのが嫌な訳ではないぞ？アレは兵士の仕事じゃからな。わらわが国に仕える者の尊い仕事を奪う訳にはいかなからな！

「言い訳をする必要はありません。アレは姫様がナオキ様の為を思っていたことですからな。………例えそれが訓練を行っていた兵

士の殆どを吹き飛ばし、練兵場に巨大なクレーターをお造りになられたとしても」

「……………実は根に持ってるじゃろう？」

「まさか！我らが愛すべき姫様の上級魔術をこの身に受けたのです。有り難くて涙を流してしまいそうです」

……………すまん。もう何も言わないでくれ。わらわの方が泣いてしまいそうじゃ…………。

アレはわざとやった訳ではないのじゃ。ナオキとカオルが褒めてくれたからつい力が入ってしまっただけで…………、最初からああするのが目的だったのではないのじゃ。決してマーカスを余波で吹き飛ばして日頃の恨みを晴らそうとした訳では…………

「姫様、これは追加です。今日中に終わらせるように。後、考えていることを口に出す癖は直しておいた方がよろしいかと…………。では、私はこれから仕事がありますので失礼いたします」

……………ぐすん。ナオキ、カオル、早く帰ってきてくれ……………！！

side
シーナ

「誰？」

わたしたちの背後に、いつの間にか現われた紫色の髪の女の人に問
いかける。

答えは期待していなかったけど、あの女の方はすぐに口を開き、さ
っきの良く響くキレイな声が荒野に響き渡る。

「私は製造番号D-3、個体名ディーバです。貴女方には“ホムン
クルス”又は“魔人”と呼ばれる者です」

「そ、そんな……、魔人が二人も!?」

まさに絶望的な状況だ。魔人一人倒すだけでも手一杯なのに、ここ
で更にもう一人だなんて……。

「なるほど。確かに魔人が一人とは限らないよね。“ここに居る魔
人は一人だけ”なんて誰も言っていないし、妙な先入観に囚われてい
たのが不味かったね」

……こんな時まで普段通りに振る舞えるレイヴン君は将来大物に
なれるね、絶対。

「それにしても、製造番号D-3というのはいったいどういう意味
なんだい？よかったら教えてもらってもいいかな？」

つてレイヴン君!? 呑気に質問なんかしてる場合じゃないよ!? 少
しはコーマとターニヤを見習って戦闘体勢に入ろうよ!! それにそ
んなこと魔人が教えてくれる筈な……

「我が主が私達を御造りになられた際に、強い者から順に付けた番
号です」

「って教えるの!？」

「?何か問題でも？」

いや、別に無いけど……。むしろ大助かりだけど……。でもね?こういうのはなんかこう……。ちょっとした駆け引きとかして極力相手に情報を与えないようにしつつも、断片的に重要な単語をポロツと漏らしたりする場面だと思っただけだなあ…………。

「D-3という言葉から察するに、君達にはA-Zまでのアルファベットで強さごとに区別され、更にその中から何番目に強いのかを数字によって表してる訳だね？」

「その通りです。私はDランク中で3番目に強い、ということになります。因みに、先程貴女方に倒されたのは製造番号G-6です」

そんな!？それじゃあ、あのディーバっていう魔人はわたしたちが倒したあの魔人よりも数段上ってこと!？そんなの、勝てるワケない!!

「貴女方はまだまだ未熟……。どう足掻いたところで私にはかきません。しかし、これから先、成長すれば私達の脅威となる可能性が高い。……よって、勝手ながら貴女方をここで排除させていただきます」

ディーバがそう言った瞬間、わたしの隣りにいたコマが吹き飛んだ。

ディーバはあそこから動いていない。かろつじて手を動かしたのだけは見えたけど、それだけだ。コマに何をしたのかはわからない。

でも……

「ゼツタイに、生き残ってみせる!!」

今のわたしたちではディーバには勝てない……。けど、わたしたち冒険者にとつての“勝利”とは、敵を倒すことではなく、“生き残る”ことそのものが“勝利”なのだ。

必ず生きて帰って、シスターに……。わたしたちの家族に『ただいま』って言うんだ!!

「クソッ!!今ので腕がイカれた!」

「コーマはもう戦えないみたいだね。仕方ない、わたしとターニヤだけで戦うからコーマとレイヴン君はサポートお願い」

「チッ!わかったよ!……足手まといは御免だからな」

「珍しく素直だね。……もしかしてこれが世に言う“死亡フラグ”なのかな?」

え!?!やめてよ!縁起でもない!!……でもホントにそう思ってしまう自分もいるから否定できない。

「こいつら、いつか泣かす!!」

「元のコーマに戻った!」

「うるせーよ!このボケボケ女が!!」

うん!これでこそコーマだ!!素直で殊勝なコーマなんてキモチ悪

いだけだもん！ホント良かった…。元に戻って。

「……………っ！？くるぞ！！」

「エアカッター」

風の刃がわたしを襲う。でもこの程度なら簡単に避けられる。デイベもそれはわかってるハズ……。なら、これは囧！本命は別にある！

エアカッターを半歩横に動いて躲す。髪が何本か切れたが気にして余裕はない。次の攻撃に備える。

デイベはコーマを攻撃した時と同じように腕を動かす。そして、突然腹部に衝撃を受けたかと思えば、何故かわたしは仰向けに倒れていた。

魔力で強化していなかったらわたしは今の攻撃で死んでいたかもしれない。事実、わたしの腹部は腹の筋肉を動かすだけで激しい痛みを訴えている。

「なかなかしぶといですね。今のは殺す気で撃つたので、それなりの威力はあった筈ですが……」

はは……。今のがそれなりの威力って……。、どんだけバケモノなんだろう？魔人は……。

「だ、大丈夫！？待ってて、今治癒かけるから！」

「ターニヤ、わたしは大丈夫だから。魔力を温存しといて」

痛む腹を無視して立ち上がる。

こんなところで死んでなんかいられない！なんとかして逃げるスキ

を見つけないと……。

「どうやら逃走するおつもりの様ですが、それは不可能です。貴女達程度の実力では私から逃れることすらできない」

「……………確かに、今のままじゃムリかもね」

「シーナ！？お前ナ二言って……………」

「コーマは黙って」

「うぐっ……………」

後ろがなんかうるさいけど、構ってるヒマはない。
獣化には時間がかかるしね。

「『今のままじゃムリ』ですか。その言い様ではまるで、私を退ける策がある様に聞こえるのですが……………」

「そう、言ってるんだよ！！」

……完全獣化！！

「ハアアアアッ！！！！」

「駄目だ！！今のシーナじゃその“能力”は制御しきれない！自滅するぞ！！」

そんなの関係ない！五割程度の獣化じゃディーバにはかなわない！
！なら、自滅覚悟の短期決戦しか生き残る道はないんだ！！！！

「ガアアアア！！」

渾身の力を込めた、爪による斬撃。デীবは最初の位置から動いていない。

それはつまり、今のわたしのスピードは魔人でも捉えられないということになる。

……イける！！

そのままの勢いで爪を振り下ろす。……だが、わたしの爪がデীবに届くことはなかった。

……躲された！？

当たっていれば、確実にその右半身を削ぎ落とすわたしの攻撃を、デীবは半歩身を引くことで紙一重で回避したのだ。

「素晴らしいスピードです。ですが、私には通じません」

「ガッ！？」

「……シーナ！！？」

攻撃を躲され、体勢を崩しているわたしの腹部は無防備に晒されていて、そこにカウンター気味の一撃。

終わったな。

思わずそう思ってしまう。今のはわたしの全てを懸けた全力以上の一撃だ。それが通用しない以上、わたしに……勝ち目は無い……。

「安心して下さい。私は彼……G-6とは違い、意味も無く対象を痛め付けることはありません。貴女に痛みを感じさせることなく、一瞬で終わらせますから……」

……それは全然安心できることじゃないと思う。

むしろ安心できる人がいたら困る。その人は多分自殺志願者だから。……ってこの状況でこんなこと考えられるわたしって実はすごく余裕あったりするのかも？

「シーナは殺させない！アイススパイク！！」

「エアハンマー」

ターニヤの放った氷柱は空気の塊にぶつかり、砕け散った。

ターニヤ……、わたしのことはいいから、早くコーマとレイヴン君を連れて逃げて！！

そう口に出そうとしても、喉が思うように動かない。多分、腹部に受けたダメージと完全獣化による影響だ。

「貴女も、その二人も彼女を始末した後に殺しますので覚悟しておいて下さい」

……くっ！ふざけるな！！お前なんか皆を殺させはしない！！
そう思っても口に出すことができず、わたしの口はまるで魚のように、ぱくぱくと開閉するだけだった。

「それではさようなら。安らかに眠って下さい」

デীবバの魔力が右手に集まっていくのが見える。その手を振り下ろす仕草をしているのが良くわかる。

だって……、こんなにゆっくりなんだもん。イヤでも良くわかる。理解できてしまう。わたしが……死ぬってことが……。

脳裏に思い浮かぶのは孤児院で過ごした日々、皆の母親代わりのシスターに、一番の友達のターニヤ。ひねくれてるけど、本当は仲間

思いのコーマに、いつもマイペースだけど実はすごく優しいレイヴン君。

そして孤児院の……わたしの妹と弟たちの顔が次々と浮かんでは消えていく。

だけど、一番最後に思い浮かんだのはジュンさんだった。

ああ……、死ぬ前にもう一度だけ逢いたかったなあ……。

でも、それはもう叶わない。だってほら、もうディーバの右手からは風の刃が放たれ、わたしの眼前にあるんだもの。

目、閉じてた方が怖くないかな……。

そう思い、目を閉じる。

……あれ？まだ死んでないの？わたし。

「人生諦めが肝心って言うけど、シーナはちょっと諦めるのが早いんじゃない？」

突然の浮遊感。全身に感じる温かい感触。……そして、聞き覚えのある優しい声……。

「ジュン……さん？」

目を開けると、そこには……

「やあシーナ。ちょっと見ない間に随分猫っぽくなったね？イメチエン？」

いつかと同じ、柔らかな笑みを浮かべるジュンさんが、わたしを抱き抱えていた。

第十五話 出番を寄越せ！

ふう……。なんとか間に合ったな。後少し来るのが遅かったらシーナが殺されるところだった。

途中でグリズリーの大群に襲われたのが痛かったな。殲滅するのに時間かかったし……。

「ジュンさん……、どうしてここに？」

「ああ、向こうで戦ってる時に知り合った冒険者の中に風の使い手がいてね。その人に探査魔術を頼んだら、魔人の反応が二つもあるって言うじゃないか。それで急いで駆けつけたったワケさ。……それに魔人がどんなのか見てみたかったしな」

「……………なんだか最後のが本音っぽいですよ？」

「本音だからね」

「そこは否定するべきじゃ……」

確かに普通なら否定する場面だけど僕は否定しない。だってこっちのが嘘だし。

本当は魔人の反応のすぐ近くを僕が探った時に、シーナに似た魔力の反応があったからなんて、口が裂けても言えないね。恥ずかし過ぎて死ねるから。

「そろそろ私を無視して話をするのを止めて頂けませんか？」

「正確には居なかったことにしてこのままの勢いで逃げるつもりだ

「ただただだな」

「……余計に止めて下さい。私の出番が無くなってしまいますから」

「僕だって最近出番無かったんだから我慢しろよ！新キャラの癖に……」

「メタな発言は止めてください！！いろいろ危ないですから！」

「……だって魔人が始めてから、碌な出番無かったんだからしょうがないじゃん。主人公なのに出演無いつて凄く悲しいんだよ！？今まで出張ってたシーナとその仲間たちには分からないさ。出番の無い者の気持ちなんて……」

「貴方はこれから活躍するのですから文句は言わないで下さい」

「……だからジュンさんもディーバもメタな発言は止めて！」

「なあ、レイヴン。オレたち、完全に忘れられてね？」

「忘れ去られてるだろうねえ……」

「なんでこんなことになってるんだろう？」

後ろで何か言ってるような気がするけど、今は意図的に無視しよう。それに今気づいたんだけど、シーナって完全獣化してるよね？これって確か……、未だ体が成長途中の子どもが使うと筋肉の繊維がズタズタになるんじゃないかな？

そんな状態のシーナをいつまでも抱えてるワケにはいけないからあの子たちの側に寝かせて置くか。

「ねえ君たち、もしかしくなくてもシーナの仲間？」

「ええ、そうです。ボクはレイヴンと言います。シーナを助けてくれて有り難う」

「あ、わたしターニヤです。よろしく」

「オレはコーマだ。………で、アンタ誰だ？シーナとはどういう関係だ？」

「コーマ！ジュンさんに失礼でしょ！！」

「シーナ、あまり怒鳴らない方がいい。大きな音を出す度にお腹の辺りがピクピク動いてるから」

さつきからずっと気になってたんだよね。多分痙攣してる。シーナはそれに気づいていない。

それはつまり、感覚がないということだ。いや、ちょっと違うか……。正確には痛みを感じることが出来ない程の痛みが生じているのだ。

これはかなり危険な状態だ。早く治療しないとヤバイ。

「今僕が誰かなんてどうでもいいだろ。大切なのは君たちが生きてここから逃げることだ」

「なんだと！？オレに敵に背を向けて逃げ出せつてのかよ！？ジョーダンじゃねえ！！誰が逃げるか！オレはアイツを……」

「殺せないだろ？」

「ぐっ……」

僕の言葉に、コマと名乗った少年は言葉に詰まる。

僕の見たところ、まともに戦えそうなのはターニャという少女だけだ。

シーナはこれ以上無茶したら間違いなく身体を壊す。後遺症も残るかもしれない。

あのレイヴンという子は多分魔術師だ。だが、魔力を殆ど感じない。恐らく、あのディーバとは違うもう一人の魔人を倒すのに使ったんだろう。

そしてコマは右腕が折れてるし、体力もかなり消耗してるみたいだ。無理をすれば戦えないこともないが、格上の存在との戦いに手負いの状態で挑むのは自殺行為だ。

それすらも分らないのなら勝手に挑んで独りで野たれ死ねばいい。

「お前たちはハッキリ言って足手まといなんだよ。とっとと消え失せろ！」

だが、それは飽くまでコマが独りで挑んだ場合の話、シーナたちが危険に曝されるのを黙って見過ごす訳にはいかない。

僕は見知らぬ人間が幾ら死のうが構わないが、見知った人が危ない目に遭うのは見過ごせない。やれやれ、我ながら難儀な性格だな。ほんと。

「…………行くよ、コマ。この人の言う通りにしよう」

「な！？こんなぼつと出のナヨつとしたヒョロイ男に好き勝手言われてお前は平気なのかよ！？」

「この人は間違ったことは言っていないよ。碌に戦えないボクたちがここにいるのも邪魔になるだけだし、仮に万全の状態で臨んだとしても勝てるかどうかかわからない相手だ。ここは大人しく退く場面だよ」

「……クソッ！」

レイヴンに冷静に諭される様は、教師に叱られている生徒みたいでちょっと面白い。

「分かったならさっさと失せろ。………北門の近くにギルドの設営した仮設テントがあるハズだ。そこで治療を受ける」

確かそんなことをギルド職員が言っていたハズだ。レンと北河も今ごろ余りの忙しさに目が回っていることだろう。何処の世界でも治療室は戦場なのだ。

「ジュンさん………、その………死なないで下さい。絶対に生きて戻ってきて下さい」

今のシーナの表情は“あの時”の母さんに似ていた。僕はこの顔が嫌いだ。というよりは苦手だ。だって嫌が応にも“あの時”のことを思い出してしまうから………。

なんてシリアスっぽい雰囲気流してみたが、あまり面白くなかった。それに母さんはそんな顔しないし。僕の母親は、僕が大怪我しても『そんなの睡つけとけば治るってこの漫画に書いてあるわよ。あ、そうだ！お母さんが舐めてあげる！大丈夫よ』キモチヨクしてア・ゲ・ル♪』とか言ってる実の息子の貞操を喪失の危機に晒すような人だったから………。

因みに僕の純潔は死守してるから大丈夫！うん、必死に抵抗したからね！

「どうかしましたか？ ジュンさん」

「ん？ なんでもないよ。 気にしないで。 さあ、 早く逃げるんだ」

母さんのことを思い出した所為で微妙な顔をしていたのをシーナに見られてしまった……。

まあいいか。 とにかく今は、 この美人さんの相手をしないとね。 北門に急ぐシーナたちを背に、 デイバーバに向き合う。

「待たせて悪かったな」

「いえ。 構いません。 私にとっては貴方の方が優先度が高いですから」

「アンタみたいな美人にそう言われると男冥利に尽きるよ」

「…………… そうですね、 貴方、 さつき口調違いますでした？」

「ああ “あれ” ……………、 別に大した意味は無いよ」

だってあれは作者が最近読んだラノベのシーンを再現しただけだから。 僕の口調だけそれっぽくしただけだ……………。 後作者って誰だ？

「そうですか。 …………… ではそろそろ始めましょうか。 魔王よ」

「そうだな。 始めようか。 魔人よ。 …………… 殺し合いを」

辺りに僕にも肌で感じ取れる程の濃密な殺気が満ちる。

殺気を向けられるのは初めて………というワケでもないが、やっぱり慣れない。てか、慣れてる方がオカシイ。……まあ少ないとはいえ、殺気を向けられたことのある僕の言えた台詞ではないが……。

「【エアカッター】」

まずは小手調べ……、とても言いたいのか、風の刃が僕に迫る。が、僕は闇のゲートから取り出した日本刀で風の刃を斬る。……そこ！目に見えない風をどうやって斬ったんだ？とか言わない！

「その刀……、只の刀ではないようですね。ですが、これならどうですか？……【トルネイド】」

ディーバの放つ荒れ狂う竜巻……。それに込められた魔力は並の術者には防ぐことすら許されない。けど……。僕には防ぐ必要すらない。

「断ち切れ。【絶牙】」

僕が刀を振えば、その全てを喰らうのだから。

この刀の銘は【絶牙】。中級以下の魔術ならその全てを断ち切り、その魔力を喰らう妖刀。所有者の魔力すら喰らい、糧とする。そう、この刀は“成長”するのだ。

魔力を喰らった分だけ切れ味が増し、断ち切れる魔術も多くなる。正に魔王たる僕に相応しい武器だ。

「それじゃ、今度は僕の番だね。……【ブラックバウンド】」

打ち出される黒の弾丸。その数なんと五十。避けるのにも一苦労だけれど、ディーバは風の障壁で黒の弾丸の軌道を逸し、障壁を抜け

た弾丸は最小限の動きで避けきつている。

僕はアレを防ぎきることは出来るが、避けきることは出来ない。それだけでディーバがどれほどの強さを持つのか理解出来る。

このままじゃジリ貧だな。お互いに魔術では傷を付けるのは難しい……。ここは接近戦を挑むべきか？

しかし、ディーバは某型月のライダーの様な容姿をしていても、Sランクの実力を持つとされる魔人の一人だ。五十人の不良と殴り合いをした経験しかない僕が玄人たる魔人に勝てるのだろうか？

え？そんな多人数と殴り合いをした人間でも自信が無いのか、だって？A H A H A H A H A！ナニツてるんデスカ？マツタク困ったチャンドスネ。僕は単なる男子高校生ですよ？武器を用いた殺し合いなんて出来るワケないじゃないですか……。……素手の殴り合いなら慣れてるけど。

まあそんなワケで、圧倒的に経験が足りない僕じゃあ接近戦を挑んでも勝てる可能性は低い。もし、ディーバが完全な魔術師タイプなら勝てる見込みもあるんだけど……。……、希望的観測でしかないしなあ……。……。本気でどうしようか？

なんて考えてる間もディーバの攻撃は止まない。次々と風属性の攻撃魔術が飛んで来る。が、僕の防御魔術……。……【ダークフィールド】の前では何の意味も成さない。この魔術は術者の身体を円形の闇が包み込み、一切の攻撃を通さない。外見は某結界師の絶。をイメージしてくれば分かりやすいと思う。後はデイス。ーション。イールドとか……。……。

「……。……このままでは埒が明きませんね」

「そう思っんならさつさと帰ったら？自分で言うのもナンだけど……。……、僕の守りは堅いよ？上級魔術でも使わない限りは破れない」

「そして、詠唱を始めようものなら、隙だらけの術者を倒すことも

可能……、中々エゲツない戦い方ですね」

失礼な！合理的な戦い方と言って欲しい！……いや、まあ僕だって主人公らしく激しい切り合いとか魔術戦とか繰り広げてみたいけど……、いきなり魔人みたいな大物と互角以上の戦いなんて出来るワケないじゃん！そんなこと出来るの理不尽なまでの強さを持ったチート主人公ぐらいしかないし……。

え？僕？ナニ言ってるの？僕は魔力に関してはチート級だけど……。他は一般人に毛が生えた程度の人間だから。一方的なワンサイドゲームなんて今は未だ出来ないよ。やるとしたら、もつと経験を積んでからになるな。

因みに、僕の魔力量がどれくらい有るかというと、ヴラド曰く、『軽く見積もっても私の五倍近くは有りますね』だそうだ。比較対象がヴラドだけなので一般的な魔術師に換算するとどれくらいになるのかと尋ねると、『私の魔力量は国に仕える魔術師部隊の平均の約十六倍です』とのこと。

流石は吸血鬼、伊達に長生きはしていないようだ。

「仕方が無いですね。私は近接格闘は専門では無いのですが……」

ディーバはそう言いながら手をこちらに向ける。いったい何をするつもりなんだ？

そして……ディーバの手から“ナニカ”が飛んで来た。

アレは……ヤバい！？

自分の勘に従い、寸でのところでなんとか躲す。だが、僕が展開していた【ダークフィールド】の一部が貫かれていた。

この【ダークフィールド】は対魔術用の防御魔術。上級魔術未満の攻撃は確実に無効化する。しかし、その反面物理的な攻撃には弱いという弱点がある。それでも、生半可な物理攻撃では破れはしないハズなのだ。

それが破られたということは、魔力付与をした武器による物理攻撃………ということになるが、今までディーバの手に武器が有るのを見たことは無かった。

僕が今思いつくのは、武器だとすれば、何故見えないのか？武器ではないと仮定した場合、それはいったいどんな攻撃方法なのか？の二つになる。

後者はまったく思いつかないが、前者ならば大体想像がつく。“見えない武器”はこの世界特有の物で実現は可能だからだ。

一つ目は『ルーン』による刻印の効果だ。それによって、武器そのものを見え辛くすることが出来る。

二つ目を魔術を使った方法だ。この場合、ディーバの属性から考えれば、風によって、光の屈折率を変え、そこには“何も無い”と誤認させることが出来る。

ただし、この方法を用いた場合、常に屈折率の計算をしなければならぬ為、かなりの演算能力が必要だ。人間の脳では、先ず不可能だ。だが相手は魔人。それくらい出来るかもしれないが………。

まあ考えても解らないんだから、今は一旦おいておこう。意識を切りかえ、ディーバの攻撃に集中する。

「はっ！！」

裂帛の気合とともに繰り出される不可視の攻撃。僕はそれを見極める為に、ギリギリまで動かない。

不可視の攻撃と言っても、何らかの気配のようなものは感じる。それを頼りにディーバの攻撃の秘密を探るしかない！

「……………がつ！？」

何発目の攻撃かはイチイチ数えてないから分からない。だが、それは確かに僕の体を掠った。

掠っただけなのに、凄まじい衝撃を受けた。恐らくはシーナもこの攻撃にやられたんだろうな。

シーナは外見上は目立った負傷は無かった……。にも関わらず、腹部が痙攣していたのは、この攻撃が原因なんだろう。

この攻撃は恐らく打撃系……。斬撃の類なら、何処かに切り傷があるハズだし、血も出るので分かりやすいからだ。因みに服をめくったワケではないので分からないが、シーナの腹部には痣が残っていると思う。

それにしてもかなり痛い……。このコートがある程度の衝撃を吸収してくれなかったら、今頃ヒドい痛みに悶え苦しんでいたと思う。けど、“見えた”アレがナンなのか、ようやく分かった。

僕の腹部は未だに激しい痛みを訴えているが、戦えない程じゃない。この程度なら我慢出来る。

なら、やってやるさ！アレの正体は大体想像出来た。後はアレを無効化出来れば……。勝てる！！……。多分。

第十六話 まだ終わらないの？

side コーマ

「コーマ。余所見してないでしっかり守ってよ」

「ウルセー！ボケボケ女！！オレは腕折れてんだからちったあ労りやがれ！！」

今オレたちはアイツに言われた通りに北門の方向に向かっている。確かに今のオレたちはキズだらけだ。治療の必要はあるだろうし、休息することも大切だ。

だが……、なかはオレにもわからねえが、アイツの言うことは素直に聞きたくない。何故かムカつく。

やっぱシーナとなれなれしく話してたからか？でも、レイヴンがシーナと仲良さげに話しても何とも思わねえんだがなあ……。ナゾだ。

「コーマ。さっきターニヤに注意されたばかりじゃないか。集中しなよ」

「だったらテメエも手伝いやがれ！！」

「無理言つなよ。ボクにはもう殆ど魔力は残ってないし、今は動けずに眠ってるシーナを背負ってる状態なんだ。戦えるハズないだろう？。」

わあってるっつーの！そんなことぐらい。だがなあ、そんなこと言

「つちまうぐらい忙しいんだよこっちは！！？」

「ウオリヤアー！！」

掛け声を挙げ、剣を今出せる全力を持つて振り抜き、オレたちの行く道を塞ぐ魔物どもを蹴散らす。だが、浅かったのか、何体かはすぐに体勢を整えて突っ込んできた。

クソッ！？片腕しか使えねえのがイテエな。致命傷を与えづらいし、片手だと剣の振り方もいつものようにはいかねえからな。

「【ウォーターアロー】」

水が矢のような勢いでオレを襲ってきた魔物を弾き飛ばす。

魔力の消費を抑えてみたいだな。普通なら今ので貫通してるハズだ。

「おい、ボケボケ女！なに手え抜いてんだよ！！」

「せっかく助けてあげたのにそんなこと言わないでよ！わたしの魔力だって残り少ないんだから！」

確かに。ターニヤは今までオレの肉体強化に援護するタメの攻撃魔術、魔人との戦いじゃあ魔力消費の激しい上級魔術まで使ってたな。ターニヤの総魔力量は普通の魔術師レベルだって聞いたような気がするし、魔力はそれほど残ってないってことになるのか。

まともに戦えるのはターニヤとオレだけ……、魔力を節約したいっていうターニヤの言い分にも納得出来るな。

「……………わあったよ！だが、出し惜しみはすんなよ？オレとお前、どっちか一人でも戦闘不能になったら生き延びることだってままな

「らねえんだからな!!」

「わかってるよぉ! コーマこそ、勝手にやられないでよねっ!!」

「言いやがったなコイツ! ? 後でゼツテエー後悔させてやつからな? 覚悟しとけよ? ボケボケ女がつ!!」

side 薫

ふう……。やっと一区切りついたかな? 重傷者はもう運ばれてこないみたいだし、これで私の魔力も温存出来るね。

「カオル様、追加の包帯と薬です」

「うん。ありがとうレンさん」

残り少なくなつてた包帯と薬を補充しにいったレンさんも帰ってきたし、治癒魔術を使う必要の無いケガ人の治療を再開出来る。私の魔力量は荻島君ほど多くは無いから、重傷者の人の為に出来るだけ節約しないと。

といっても私自身、自分の魔力がどれくらい有るのかなんてよくわからないんだよね。前に宮廷魔術師の人に説明はされたんだけど、イマイチピンとこなかった。

なんか、荻島君が規格外の量だつて騒がれてたのは覚えてる。私の

魔力量もそれなりに多いってこともわかってる。

でも普通の人と比べてどれくらい多いのかは知らない。魔力量を調べてくれた宮廷魔術師の人が『は、ははは……。御二人とも、結構な魔力量をお持ちで……。あは、あははは……。はあ……。』って笑いだしてどっか行っちゃったから結局わからずじまいなんだよね。

あの人どうしたのかな？なんだか凄く疲れた表情浮かべてたけど……

……、具合でも悪かったのかな？

もしそうだったんだとしたら、今度お菓子でも作ってプレゼントしよう。ストレス解消にもなるし、わざわざ調べてもらったお礼にもなるし。

て、今はそんなこと考えてる場合じゃなかった！早く治療を再会しないと！

え〜っと……。この人は出血が酷くて重傷っぽいけど、見た目ほど深い傷じゃないみたい。これなら患部をタオルで拭いて包帯巻くだけで充分かな？

こっちの子は足が折れたみたいね。治癒魔術を使わないと治んないな。魔力は出来るだけ温存したいから……。添え木とかで良いかな？え〜っと、次は……。ん？なんだか入口の方が騒がしいな。どうしたんだろう？また急患かな？

「おい！何も無いところで転ぶな！ボケー！！」

「だつて……」

「ターニヤが何も無い所で転ぶのはいつものことだろ？そんなことにイチイチ目くじら立てないでよ。周りの人に迷惑だから」

……。なんだか凄く騒がしい子たちだな。どこケガしてるんだろ？今ざっと見た限りじゃ、先頭を歩いてる赤髪の男の子は腕が折れて

るみたいだ。他の子は擦り傷とかいっぱいあるけど平気そ………て、あれ？後ろを歩いてる灰色の髪の子が背負ってるのってもしかして………

「シーナ、ちゃん……？」

そうだ。間違いない。あの子の背中であたりしている獣人の女の子は間違いないくシーナちゃんだ。

シーナちゃんの可愛い顔はこれでもかと言うほど苦痛に歪んでいて、顔色も真っ青だ。エメラルドのような綺麗な瞳は閉ざされている。

ここからじゃそれぐらいしかわからないけど、相当苦しそうなのは間違いないだろう。他に命に関わるような大けがを負っている人は居ないし、知り合いを優先して診ても文句は言われない………と思う。

そうと決まれば早速あの子たちの所に行かないと、私に気付かずに素通りしちゃいそうだし。

私はシーナちゃんとその仲間であると思われる子どもたちの下へ向かった。

side 尚輝

「ライナス！オレが詠唱終わらせるまでヤツの注意を惹きつけとけよ！」

「任せとけ！その仕事、キツチリこなしてやるからよ！」

「私は君に対する攻撃を可能な限り防御しよう。とても防げそうにない攻撃は合図するから避けてくれよ？」

「ああ、それぐらいなら楽勝だ！詠唱しながらでも避けてやるぜ！」

詠唱……… つつても、姫さんがやってたのを再現するだけだ。そんなに難しいことじゃねえ。……… ん？今『お前がそんなこと覚えてるワケねえだろ』とか言われた気がする……。一応言っとくけどな、オレは暗記するだけなら得意なんだよ！数学みてえに自分で答えを出したりするのが苦手なだけだ！……… まあ潤はテストなんてゲームと同じだ、とか言って毎回高得点を叩き出してゐるがな………。

とにかく、今一番問題なのは、オレが漫画の主人公みたく“ぶつつけ本番で今まで一度も成功させたことのない必殺技を発動させることが出来るのか……？”ってことだ。

魔術師にとって、上級魔術を使えるようになるってのは、ようやく半人前として扱ってもらえるってことだ。中級魔術を使いこなせても半人前以下の扱いだ。いわばひよっこだ。オレも中級魔術を使えるようになって数日が過ぎた。ここに来る前は城で兵士との模擬戦を繰り広げ、魔王城までの旅じゃあ襲いかかる魔物を蹴散らしてきた。そのお陰で経験もそれなりに積めたし、動物を殺すことにも少しは慣れた……。

それでもまだ、中級魔術を使いこなせるようになったとは言えねえ。そんなオレが、一回も練習していない上級魔術を発動させようってんだ。魔術師からしたら失笑もんだろうな。

それでもオレは、やらなきゃならねえ……。生きるために………。

ラガルトとライナスを助けるために……………。

「【来たれ。不浄なる者を滅ぼす浄化の光よ】」

オレの口から紡がれる言葉は、頭ではきちんと聞こえているが、心では別の意味を持つているように感じる……………。

この感覚は間違いなく姫さんが詠唱していた時と同じだ。なら、この調子で詠唱していけば、出来るかもな。上級魔術を……………。

「【集え。闇を切り裂く一条の光よ】」

オレから溢れ出る魔力は山吹色に輝き、オレの目の前に集まってく……………。

「【我が前に立ち塞がる絶望を照らし、皆に希望を与えたまえ】」

集まってきた魔力はどんどん大きくなっていき、やがてバスケットボールほどの大きさになった。

何となく元気玉とか作ってる気分になってきた。かめ。め波とか言ってた昔が懐かしい……………。と、今はそんなこと考えてる場合じゃなかった！集中しねえと……………。

「くっ！まだなのかい！？私もライナスももう保たないぞ！！」

やばっ……………。詠唱に集中してて気付かなかった。ライナスはかなりボロボロだし肩が激しく上下に動いてる。体力が限界に近いみてえだな。

ラガルトはまだ体力に余裕はありそうだが、精神的にキツそうだ。まあそらそうだな。迫りくる鉄塊やらプレスやらを何度も何度も受けてるんだし。

例えるなら猫だましをされた気分だな。くるのが分かっててもついで目をつむってしまう感じ……。ちよつと違うか。
まあいい。そんなことよりもさっさと終わらせちまおう。それが二人を助けることにもなる。

「【偉大なる太陽神の名の許に】」

詠唱は完成した。だが、やっぱぶつつけ本番はキツイみたいだな……。術式がかなり不安定だ。このままじゃ、術式が崩壊しちまう！術式が崩壊すれば、詠唱をまた初めからやり直す必要がある。それだけは防ぎてえ……。

オレたちにはもう、悠長に詠唱してる時間なんかないんだ！……ここは大量の魔力を術式に流し込んで無理矢理発動させるしか……。

「ヤバい！？逃げろ！！」

「……………っ！？」

ラガルトの風の防壁を突破した、今までのそれよりも数倍の魔力が内包されたプレスが、オレの視界を白く染め上げた。

side 潤

「はっ！！」

「ちい!？」

前回、“見えた”とか言っておきながら、ディーバの苛烈な攻撃により、僕は未だに突破口を見つけられずにいた。

いや、マジすんませんした。カッコつけてゴメンナサイ…………。

これは無理だつて、“アレ”が何なのか解つても防げなきや意味ないもん!

一応対魔術防御用の【ダークフィールド】とは対を為す、対物理専用の【グラヴィティフィールド】っていう防御魔術とかあるけど、それを発動させた途端、魔術での攻撃に切り替えるのは目に見えている。

攻撃魔術が一つ一つ飛んでくるなら僕だつて簡単に防ぐなり避けるなりは出来る。けど…………、前に僕が大量の【ブラックバウンド】を放った時みたく、一遍にこられたり、連続で放たれたりしたら…………僕は負ける。

だから、僕に取れる選択肢はこのまま負けるか、援軍が来るまで持ち堪えるか、あの攻撃をどうにかして封じるかの三つしかないワケで…………。

一つ目は僕が死ぬしかないから却下。

二つ目は援軍が来るかどうかわからないし、それまで保つかも定かではないので保留。

三つ目は封じる方法が未だに思い付かないので取りあえず保留だ。

うん。マジでどうしょ?あれだけカッコつけたワケだし、出来れば三つ目を選びたいんだけどねえ…………。

二つ目は最後の手段にするとして、三つ目を採用するしかないんだよなあ…………。よし。頑張ろう!

と、意気込んだところでどうすることも出来ないだけだな。こうなつたら腕一本犠牲にして無理矢理掴んでみるか?北河の治癒魔術があれば治る可能性もあるし。

……ん？ “掴む”……？ なんだろっ、何か良いアイデアが閃きそうな気がしてきたぞ？
うゝむ………？ そうだ！ そっいえばあの某格闘漫画にも似たようなシーンがあったじゃないか！ あのシーンを真似出来れば勝つる！！
……… 前回もそんな感じの台詞を言ったような気がするけどそこは気にしない方向で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9185h/>

魔王になった元一般人

2010年10月9日06時59分発行